太政類典第二編第三百五十一卷 自明治四年八月至同十年十二月

第六類

治罪五

行刑三

十年二月廿六日

鹿児島縣士族中山中左衛門以下十五名犯罪處斷

司法省伺

鹿児島縣士族中山中左衛門以下十五名擬律別紙ノ通リ大審院ヨリ申出候處律ニ國事犯ノ正條無之儀ニ付罪案并擬律案相添仰御裁決候也司法 二月十七日

上申ノ通ト下ス 二月廿六日

（別紙）

鹿児島縣士族中山中左衛門以下十五名ノモノ國事

犯一件ニ付夫々審問ヲ遂ケ候末別紙罪案ノ通リ結審相成候ニ付別紙擬律ノ如ク處分イタシ可然哉別紙目錄ノ通リ書類相添此段相伺候也　二月七日

國事犯御處分擬律案

詠犯一時當路ノ大臣ヲ刺殺セント其畫策ヲナシ大擧シテ朝廷ニ迫リ政体改革アランヿヲ協議シ朝憲ヲ紊亂セント企タルニ依リ之ヲ明治四年外山光輔ノ隱謀ニ關係シタル小和野廣人妹尾三郎平等ノ口供ニ照合スレハ其情狀類似シタルニ付廣人三郎平ノ禁獄終身ニ權衡シ除族ノ上懲役終身ニ處スヘキ處廣人三郎平等ニ於テハ同志申合セ勤王ヲ名トシ暗ニ攘夷ノ策ヲ立テ以テ還幸ヲ促シ若採用之レナキトキハ鳳輦ヲ奪フヘシト企テ且其兵タルヤ各藩ヲ誘導シテ之レヲ募ラントスルノ策ヲ設ク左スレハ交際親睦ナル外國人ヲ私ニ襲擊シテ國難ヲ釀サントシ及ヒ至尊ヲ憚ラサルノ策ヲ立テ且藩兵ヲ借ラントスル等事皆重大ニ係ルヿニテ詠犯ノ隱謀トハ稍逕庭アルヲ以テ其情罪ヲ酌量シ一等ヲ減シ中山中左衛門以下斷刑ノ儀明治四年外山光輔愛宕通旭等ノ隱謀ヲナシタル類例ニ權衡シ本紙ノ通擬律相付シ候處小和野廣人妹尾三郎平等ニ於テハ何レモ庶人ニ下シ禁獄ニ處セラレタリ然ルニ詠時ノ禁獄ニ於ケルヤ現今ノ閏刑ニ非サルヲ以テ小和野廣人妹尾三郎平等ヲ庶人ニ下シタル上禁獄ニ處セラレシハ現今ノ律ニ比スレハ除族ノ上懲役ニ處スルヲ相當ト見込候依テ平民山本

克中沼清蔵山本文之助ヲ除クノ外ハ乃チ除族ノ上懲役ニ擬律イタシ候事

除族ノ上

懲役十年　　中山中左衛門

談犯中山中左衛門児玉等當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ発意ニ同シ其意ヲ承ケテ往復周旋シ刺殺ノ旨意書ヲ起稿スル等朝憲ヲ紊乱セント企タルノ從ニ付本犯懲役十年ヨリ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役七年　　丹羽精五郎

談犯中山中左衛門當路ノ大臣ヲ刺殺セント企ルニ同意シ其意ヲ承ケテ周旋ヲナスモ丹羽精五郎ニ比スレハ其情状軽キ者ニ付精五郎ノ懲役七年ヨリ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役五年　　濱島正誠

談犯児玉等當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ発意ニ同シ仍ホ自己ニ於テモ事ヲ遂ケヘキ決心ノ旨ヲ中山中左衛門ヘ申聞爾後其指揮ヲ受ルヲ以テ到底中山中左衛門ノ從ニ擬スヘキモ丹羽精五郎ニ比スレハ其情状軽キ者ニ付精五郎ノ懲役七年ヨリ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役五年　　土持拾之助

国立公文書館
National Archives of Japan

詠犯中山中左衛門當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルニ同意シ爾後其大臣ノ動靜ヲ探索スヘキ旨ヲ託サレタルニ依リ山本文之助ハ通知シタルマテニ濱島正誠土持拾之助等ニ比スレハ其情狀尚輕キモノニ付正誠拾之助ノ懲役五年ヨリ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役三年

三浦清風

詠犯中山中左衛門當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルニ付其大臣ノ動靜ヲ探索スヘキモノニ三浦清風ヲ以テ中山中左衛門ヨリ依頼ヲ受ルモ未タ其事ニ著手セサルヲ以テ濱島正誠土持拾之助等ニ比スレハ其情狀尚輕キ者ニ付正誠拾之助ノ懲役五年ヨリ一等ヲ減シ

懲役三年

山本文之助

詠犯州羽精五郎ニ於テ同志兒玉等等ト當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ謀議ニ同意シタルモ素ヨリ其周旋ヲナスニイタラス且詠犯ニ於テハ中山中左衛門兒玉等等ヘ直チニ面議シタルニ非サレハ同シク從トイヘトモ三浦清風山本文之助等ニ比スレハ其情狀尤輕キ者ニ付清風文之助ノ懲役三年ヨリ二等ヲ減シ

除族ノ上

懲役二年

柿本勤

詠犯一時當路ノ大臣ヲ刺殺セント発意シ其畫策ヲナシ朝憲ヲ紊乱セントスルニ依リ之レヲ明治四

国立公文書館
National Archives of Japan

年外山光輔ノ隠謀ニ関係シタル小和野廣人妹尾三郎平等ノ口供ニ照合スレハ其情狀類似シタルニ付廣人三郎平ノ禁獄終身ニ權衡シ除族ノ上懲役終身ニ處スヘキ處廣人三郎平等ニ於テハ同志申合セ勤王ヲ名トシ暗ニ攘夷ノ策ヲ立以テ還幸ヲ促シ若シ採用之ナキトキハ鳳輦ヲ奪フヘクト企テ且其兵タルヤ各藩ヲ誘導シテ之レヲ募ラントスルノ策ヲ設ケ左スレハ交際親睦ナル外國人ヲ私ニ襲撃シテ國難ヲ釀サントシ及ヒ至尊ヲ憚ラサルノ策ヲ立且藩兵ヲ借ラントスル等事皆重大ニ係ルヿニテ該犯ノ隠謀トハ稍逕庭アルヲ以テ其情罪ヲ酌量シ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役十年

兒玉等

兒玉等義ハ兼テ宿病有之既ニ即今入院治療中ノモノニ付本紙擬律ノ如ク懲役ノ処断ニ及ヒ候時ハ或ハ其役ニ堪兼候儀ト推考イタシ候依テ之レヲ常律ニ照準スレハ尤小疾疾収贖條ニ依リ収贖ヲユルスヘキ儀ニ候ヘトモ該犯ニ於テハ素ヨリ國事犯ニ係ル者ニテ其情罪尋常犯者ト仝シカラサルニ付医員診断ノ上果シテ疾疾ト見据候節ハ懲役ヲ禁獄ニ換ヘ除族ノ上禁獄十年ニ処シ然ルヘク見込候事

該犯兒玉等當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ發意ニ仝シ尓後屢會合協力シ朝憲ヲ紊乱セントト企タルノ

從ニ付本犯懲役十年ヨリ一等ヲ減シ

除族ノ上

懲役七年

七戸不二郎

該犯児玉肯當路ノ大臣ヲ刺殺セント企ルニ同意シタルモ素ヨリ其間從ヲナスニ至ラス且其謀議ニ於テモ深ク関係シタルニ非サレハ全ク從トイヘドモ七戸不二郎ト比スレハ情状尤軽庭アルヲ以テ其情罪ヲ酌量シ不二郎ノ懲役七年ヨリ四等ヲ減シ

除族ノ上

懲役二年

志垣周策

森川篁

該犯當路ノ大臣ヲ誅戮セントヲ謀リ朝憲ヲ紊乱セントト企ルニ依リ之レヲ明治四年外山光輔ノ隠謀ニ関係シタル小和野廣人妹尾三郎平等ノ口供ニ照合スレハ其情状類似シタルニ付廣人三郎平ノ禁獄終身ニ処スヘキ処廣人三郎平等ニ於テハ公志申合セ勤王ヲ名トシ暗ニ攘夷ノ策ヲ立テ以テ還幸ヲ促シ若シ採用之レナキトキハ鳳輦ヲ奪フヘクト企テ且其兵タルヤ各藩ヲ誘導シテ之レヲ募ラントスルノ策ヲ設ク左スレハ交際親睦ナル外國人ヲ私ニ襲撃シテ國難ヲ釀サントシ及ヒ至尊ヲ憚ラサルノ策ヲ立且藩兵ヲ借ラントスル等事皆重大ニ係ルヿニテ該犯ノ隠謀トハ稍逕庭ナルノミナラス中山中左衛門児玉等等ノ如ク未タ其畫策ヲ

国立公文書館
National Archives of Japan

ナサヽルヲ以テ亦中左衛門等ト企視スヘカラス依テ其情罪ヲ酌量シ懲役終身ヨリ一等ヲ減シ

懲役七年　山本克

該犯山本克等ト人衆ニテ朝廷ニ迫訴シ政体改革ヲ申出ヘクト協議シ尓後中山中左衛門ニ於テ兇玉等ト當路ノ大臣ヲ刺殺スヘク謀議シタル旨ヲ承知シ其機會ヲ待居ルトノ了ニテ深ク其事ニ関カラサルヲ以テ直チニ山本克ノ從ニ擬スヘカラス依テ其情罪ヲ酌量シ克ノ懲役七年ヨリ二等ヲ減シ

除族ノ上　懲役三年　島邨安度　志佐要一郎

該犯中山中左衛門當路ノ大臣ヲ黙ケントスルノ企ニ全意シ尓後又山本克島邨安度中山中左衛門ト當路ノ大臣ヲ誅戮セントスルノ謀議ニ與リタルモ素ヨリ其周旋ヲナスニ至ラス且其事ニ於テモ深ク関係シタルニ非サルヲ以テ島村安度志佐要一郎ニ比スレハ其情状尤軽キモノニ付安度要一郎ノ懲役三年ヨリ二等ヲ減シ

懲役二年　中沼清蔵

該犯山本克當路ノ大臣ヲ誅戮セントスルノ謀議ニ與リ又ヒ中沼清蔵島村安度等ト人衆ニテ迫訴シ大臣ヲ黙ケント中山中左衛門ヘモ謀議ストイヘドモ

素ヨリ其周旋ヲナスニ至ラス且其事ニ於テモ深ク
關係シタルニ非サルヲ以テ島邨安度、志佐要一郎ニ
比スレハ其情状尤軽キ者ニ付安度要一郎ノ懲役三
年ヨリ二等ヲ減シ

除族ノ上

懲役二年

鹿兒島縣士族　小笠原　和平

中山中左衛門

四十三年二ヶ月

一自今儀明治八年六月八日縣地出立六月十二三日
頃西京着滞京七日程ニテ尚又大阪ニ至リ八日程
逗留夫ヨリ七月二十七日茂船ニテ横濱ヘ到着イ
タシ翌日櫻田島津久光ノ邸内ニ罷在候仝郷ノ者
長屋ヘ着仝八月上旬ヨリ二葉町小松屋ト申ス菓
子屋ヘ下宿十六七日頃マテ罷在候処家内病人有
之ニ付久保町尾張屋ト申ス多葉粉屋ヘ轉宿仝九
月上旬ヨリ復櫻田島津邸内長屋ニ住居罷在候事
一明治八年九月上旬櫻田邸内ヘ移住後十日程モ相
立候頃鹿兒島縣士族兒玉等罷越シ近頃傳聞スル
ニ横須賀ニテ大砲彈藥ヲ盗ミタルモノ有之由此
ハ必ス望ム所アリテノ事ナルヘシ付テハ自分党
類凡二百人モ遠近ニ有之此内四十人住ハ東京ニ
罷在候ニ付急速自分兵ヨリ事ヲ拳クスンハ必先
鞭ヲ着ケラルヘシト申スニ付其儀ハ決テ宜シカ
ラス近日ヨリ左府公モ出勤セラルヽニ付天下ノ

事尽力モ之レアルヘシ粗暴ノ挙動ヲナセハ黄一左
府公モ迷惑ニナルヘシト申セシ処不為ニナル上ハ
致シ方モ無之候ヘトモ三菱船モ已ニ買入アルニ
付迚モ其者共聞入レ間敷又船ノ断リモ出来兼候次
第且其人数ヲ説得シ船ヲ返スニハ国元ノ方ニテ
黄金家ノ者受合ネハ成サル旨申聞候其内自分母
病死ノ旨縣地ヨリ報知有之居喪中兼テ華頂宮ノ
付従ニテ公官薩摩ニ御下向ノ節召連レニナリタ
ル因故ニテ和己ニ相成候愛知縣士族丹羽精五郎
ト申ス者東京ニ罷在自分着京以来折々面会イタ
シ居候処十月初旬ヨリ華頂宮病気ニテ全快ノ期
モ相見ヘサルニ付昼夜看護イタシ候ヘトモ今扶
従モ有之丁故不自由ハ無之方今ノ時勢空シク消

日スルハ不本懐ノ次第ニ付宮ヲ辞シ下宿スル間
自分方ヘ差置キ呉レ候様相談有之候ヘトモ邸内
ハ不都合ニ付相断リ烏森町旧新発田ノ長屋ヘ寄
留折々往来イタシ候然ル処左府公建白ノ次第モ
貫徹セサル勢ト相考候折柄丹羽精五郎ニ於テモ
必ス奸物アルニ因テ行ハレス其壅蔽ヲナスモノ
ハ太戸参議ナラン依テ之レヲ除クニハ児玉等ニ
力ヲ添ヘ事ヲ遂クベク聞其旨趣ヲ児玉等ヘ通シ
呉候様依頼ニ付当日和泉橋近所ノ児玉等下宿ヘ
参リ丹羽精五郎正義ノ旨申通シタル処児玉等見
込ニ三條太政大臣岩倉右大臣太戸参議大久保参
議ノ四人ヲ殺戮セネハナラスト申スニ付自分ハ
参議ハ兎モ角ニ三條岩倉二大臣ハ外国交際モア

ル丁改殺戮ハ宜シカラスト申セシ処児玉等申ス
ニ木戸大久保ハ専断ニ付是非殺戮スヘシト申シ
其内木戸参議ヘ参ル群理人二人ヨリ巣鴨ニアル
木戸ノ屋敷ノ模様ヲ丹羽精五郎聞出シ児玉等丹
羽精五郎両人ニテ探索ノ為ノ奔走イタシ候ヘト
モ自分ハ迚モ及ハサル丁ト見込候ニ付関係イタザ
ス専ラ両人ニテ擔當イタシ居候ヨリ十月二十
日過ニイタリ児玉等全志ノ内十五名程ハ兼ホテ
兄弟全様交リ居モノナレドモ何レモ困窮シ宿
代モ拂ヒ難ク候ニ付調金イタシ呉レヘキ旨丹羽
精五郎ヨリ自分ヘ依頼ニ付金高ハ若干ナリヤト
相尋候処凡一人ニ付十五圓位ニテ可然旨申候ニ
付其後十一月四日自分方ニテ調金相成候ニ付前

ノ十五人ニ二人ヲ増シ児玉等共ニ十八人分百八
十円外ニ児玉等ニ二十圓丹羽精五郎ニ三十円都
合二百三十圓差遣シ其後尚又宿代ニ差支候趣ニ
付二十圓差遣申候処十一月廿日過ニイタリ候テ
モ何事モ無之候ニ付調金ノ為メニ斬姦ヲ名トシ
タルニハ非スヤト不審ニ存シ疑ヲ生候ヘトモ自
分ハ其節肥後米商法ニ取掛リ居候ニ付事今日マ
テ足下ノ事果ス能ハカレハ止ムルニ如カス且自
分ハ外ニ見込有之ト申セシ処丹羽精五郎申スニ
同志ノ内病人モ有之殊ニ木戸ハ病氣勝ニテ参朝
セス其ヲ方向ヲ失スルユヘ大久保一名ノ殺戮ニ
取掛ルヘシト申聞候ニ付成程自分ニ於テモ左府
公願ノ上辞職ニナリタルハ大久保ノ所為ナリト

頻リニ聞及候ニ付暗殺ノ儀然ルヘクト申候処輙ク時ヲ見合事ヲ行フヘシト丹羽精五郎申シ其日相別レ夫ヨリ十二月初旬丹羽精五郎ヨリ大久保一名ノ見込ニ相決シ近日ノ内同志中ノ病人モ全快スレハ事ヲナスヘク付テハ當十月前頃児玉ニ於テ十八名ノ人數ニ離盃ヲナス企ナレトモ金圓無之ニ付指合有之候ハヽ遣シ呉レヘキ旨丹羽精五郎申スニ付今日右ノ如キ酒宴ヲナスハ如何ノト存候ヘトモ壹人當ニテ十八圓差遣申候其後十二月廿二三日頃ニ三十間堀兵庫屋ト申ス船宿ニ止宿中丹羽精五郎尋ネ参リ已ニ大久保参議ノ一近日ニ果スヘクト斬奸ノ趣意書ヲ見ヲ事起稿シ丹羽精五郎轉作シタル由ニテ其草稿ヲ丹羽精五郎持参シ一覧ニ出シタルニ付自分ニ於テハ異存無之候ヘトモ大久保利通事ト認候方可然旨中間ヶ其日ハ支レマテニテ丹羽精五郎モ既リ申候然ル処児玉等ノ處置上往々不審ノ廉有之ニ付全縣士族濱崎正誠ハ公病ニテ折々丹羽精五郎児玉等抔ト往来イタシ候ニ付児玉事ノ様子素候処真ニ斬奸ノ趣意ナル由申聞タレ氏自分ハ仍ホ少シク疑惑モ有之候処十二月二十五六日頃児玉事丹羽精五郎自分宅ニ参リ候ヘトモ自分ハ病人モ有之欲見イタシ居ル内景早書付モ出来懐中スレハ近々ノ内事ヲ果スヘシト申マニ付其手配ハ如何ト相尋候処馬車一輌ニ三人ノ力モリ十リト申スニ付夫ハ迚モ果ス能ハスト申セシ処四人ニスヘ

クト申シ其上探索ハイタサス白昼ニ殺戮シ直ニ
司法省ヘ自訴スヘキ見込ノ趣申聞候ヘトモ自分
ニ於テハ馬車モ折々乗替有之ニ付探索ナクテハ
覺束ナク存候其後九年一月二日ヨリ芝新銭座ニ
從弟其買求ノタル屋敷一軒有之ニ付其方ニ参リ
全居イタシ候処一月四日丹羽精五郎参リ探索ノ
事ハ一笑ニ付シタシトモ探索ナクテハ能ハサル
ニ付手配イタシ呉候様兒玉等ヨリ傳言ノ趣申聞
候ニ付承諾イタシ文ヨリ山本文之助ハ旧幕人ニ
テ兼テ知ル人ニ付一月六日呼寄セ探索ノ儀依頼
セシ処勘考ノ上返答イタスヘキ旨ニテ罷帰申候
然ル処右事件ニ付警視廳ヨリ探索有之由ニテ一
月八日丹羽精五郎ハ身ヲ隠レタル由傳言ヲ聞キ

兒玉等ハ同十一二日頃縛ニ付キタル趣其後一月
十三日山本文之助新銭座ヘ参リ探索ノ勘考ス
ルモ急ニハ手掛リモ無之旨申聞候然ル処全十四
日自分モ警視廳ヘ拘引相成其後大審院ニ於テ御
吟味ヲ受ケ候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十二日　中山中左衛門　拇印

一粗暴ノ挙動ヲナセハ左府公ノ不為ニ相成ルヘキ
ニ付夫テ宜シカラスト申聞候処兒玉等承諾イタ
シ候ヘトモ三菱船ノ儀ニ付差支有之旨申聞候ニ
付右ハ縣地ノ方ヘ申遣候ヘハ如何様ニモ都合ナ
ルヘキ旨申聞候

国立公文書館
National Archives of Japan

一丹羽精五郎正義ノ百ヲ児玉等自分方ヘ参リ候節相話呉候様精五郎申聞候処其後児玉等自分方ヘ参リ候ニ付其通等ヘ相話候次第ニヲ自分ヨリ等方ヘ罷越相話候儀ニ無之候事

一児玉等方ヘ丹羽精五郎相越面會ノ後児玉等自分方ヘ参リ丹羽正義ニテカヲ得候ニ付暗殺ノ儀申談候旨申聞候ニ付粗暴ノ挙動ハ決シテ不宜旨申聞候処等ニ於テ承諾イタシ候事

一児玉等参リ度々剣客ノ儀申聞候ニ付右様粗暴ノ儀ハ決シテ宜シカラサル旨申聞差留候ヘトモ丹羽精五郎ヘ面會イタシ候節ハ最早時勢モ切迫ニ付其節ハ差止不申候

一児玉等ヘ面會ノ節丹羽精五郎ハ正義ノ者ニヲカヲ得タルト申聞候ニ付其カヲ得候ト申スヿハ中左衛門ニ於テハ家内等ヘ暗殺ヲ差留候ヘトモ家内ヨリ暗殺ノ儀ヲ見込居候ニ付夫張其暗殺ノヿニカヲ得タルヿト思量イタシ候尤両大臣暗殺ノ儀ハ決テ不宜旨申聞置候事

一三公ハ朝廷大切ノ大臣ニ有之参議トハ格別相違ノ儀ニ付参議暗殺ノ儀ハ銘々見込アレハ其人々ノ見込次第ニヲ宜敷哉ト存候間別段差留不申候事

一十月二十日過調金ノ儀ヲ丹羽精五郎頼ミニ参リ候ハ兼テ児玉等ト約束イタシ置候儀ニ付丹羽精五郎参リ候次第ニヲ其節精五郎ノ口上振ハ既ト相覚不申候事

但右児玉等ヨリ借用金ノ申入レ有之候ハ長等
縣士族松園其十ハモノヨリ自分ヘ兼テ依頼有
之児玉等右周旋ヲイタシ候ニ付差遣候原因ニ
有之候事
調金云々不審ニ存シ候トハ丹羽精五郎ヲ華頂宮
ヨリ間諜ニ差入レラルヽトノ風説モ有之ヨリ旁
不審ノ疑惑ヲ生シ候事
一自分ハ外ニ見込有之ト申セシ処丹羽精五郎申ス
ニ全志ノ内病人ニ有之選引イタシ候ヘトモ今日
ニイタリ差留候儀ハ甚六ツヶ敷旨申聞候
一今日ニ至テハ木戸参議ヨリ大久保参議ノ方専断
ノ由聞及且左府公辞職モ大久保ノ所為ナリトノ
風説児玉ヨリ承リ居候ニ付大久保一名ニスヘク

ト児玉等勘考中ノ旨精五郎申聞候ニ付自分ニ於
テモ大久保ノ悪評ハ頻リニ聞及候ヘトモ自分ハ
外ニ勘考モ有之候ニ付児玉ヘ差留ノ義申聞候処
丹羽ニ於テハ児玉ヘ相談ノ上返答スヘク旨申聞
候
一大久保一名ニ決シ候旨丹羽精五郎申聞候ニ付自
分ニ於テハ別段差留不申候事
但シ離杯ニ付金談ノ儀ハ其當日ニ無之時日ヲ
置キ候事ト相覚申候
一丹羽書面ヲ持参イタシ候節明晩児玉等櫻田邸内
自分旅宿ヘ参リ候様傳言ヲ相託シ候処翌晩児玉
等自分方ヘ相越候事
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十三日、

中山中左衛門　拇印

鹿児島縣士族

兒玉軍治郎

兒　玉　等

北五年三ヶ月

一自分儀明治七年四月中台湾征討ノ節西郷陸軍中將ニ付屬出張イタシ公八月中帰京通リ新石町青木屋小助方ヘ止宿夫ヨリ神田柳町尼屋冨次郎方ヘ轉宿其後再ヒ青木屋ニ移リ翌八年十一月中又尼屋冨次郎方ヘ引移リ止宿イタシ居此ノ如ク永々滞留罷在候モ万一國家変事有之トキハ公志申合セ尽力イタシ度ト兼テ志願ニテ諸縣ヨリ出京イタシ居ル高名有志ニ相交リ國家ノ形勢モ見聞罷在候処近時廟堂上ノ事ヲ承聞スルニ参議木戸孝允大久保利通ノ二人政權ヲ恣ニシ國家ヲ顧ミス己ヲ利スルヲ專ラトシ内ハ皇族ヲ壓制シ且大勲ノ元老ヲ擯斥シ忠義ノ臣ヲ退ケ又讒謗律ヲ設ケテ忠諫直言ノ路ヲ塞キ或ハ無用ノ土木ヲ起シ租税ヲ重歛シテ民ヲ苦シメ只洋夷ヲ尊敬シ外國ノ交際ヲ漫ニシテ皇國ノ金貨ヲ濫出ス実ニ今日ノ勢遂ニ洋夷ノ奴隷トナッテ止マン乎暴政ヲ行フ丈シ此ノ如シ賣國ノ賊臣ト謂フベキナリ依テ國家ノ事ヲ憂慮スルニ到底此二人ヲ斃シ御政体ヲ一変イタサズンハ皇國ヲシテ永ク冨山ノ安キニ置クヿ能ハスト見込ミ遂ニ諸有志ノ議論ヲ聞

クニ口ニハ慷慨ヲ唱ヘ候ヘドモ心膽ハ死ヲ以テ
國家ニ報ユルト申者無之歎息罷在候処六月中公
縣士族中山中左衛門出京イタシ候趨傳承イタシ
候間公人寄留内幸町從一位島津久光卿内ニ尋參
リ御政体ノ咄ニ及候ヘトモ確乎タル議論モ無之
其後數度面會遂ニ木戸大久保ノ奸臣ヲ斃サスン
ハ御政体改革相成スト見込始終殘ラス吐論候処
中山中左衛門ニモ同意イタシ候ヘトモ必ス卒尓
ニ渉ルマシク旨申聞候間自分ニハ夫ヨリ公志ヲ
聚ムヘクト存候柄九月下旬朝鮮江華湾ニ於テ
我軍艦ニ砲撃セシ事御布告ニ相成リ候然ルニ内
地此時勢ニシテ外患ノ起ル遂ニ國家危急ニ陥ル
ヘシ速ニ木戸大久保ヲ斃スヲ上策ト存候内十月

中左大臣島津久光參議板垣退助免官相成候ニ付
諸有志落膽策ノ施スヘキナシ自分ニ於テハ最早
坐視スルトキニアラス嘶然憤発シテ事ヲ果スヘ
シト存シ又中山中左衛門ニ内參議ヲ斃スヿ何分
公志ノ都合ヨリ遷延ニ及候間成ルヘク速ニ果ス
ヘクト相謀リ候処中山中左衛門ニモ快然ト協議
イタシ勿論其前ヨリ受知縣士族丹羽精五郎儀中
山中左衛門方ヘ正宿羅在追々懇意ニ相成丹羽精
五郎トモ方殺害ノ次第相談イタシ或日中山中左
衛門ヨリ公志ノ人員相尋候ニ付十七八名有之ト
答置丹羽精五郎ニモ公様申聞置尤丹羽精五郎ト
謀議イタシ候様相成候後ハ諸事中山中左衛門ト
自分ノ間ニ在テ通報イタシ候都合ニ有之併シ實

ハ公志無之ヲ憂ヒ罷在候処旧白川縣士族横田弁
ト云者愛宕下町二丁目片桐邸内ニ塙家塾ヲ開キ
居塾生旧白川縣士族森川篁清島龍太郎志垣月乗
青森縣士族七戸不二郎等ハ兼テ懇意イタシ所々
ニ公伴當時ノ形勢ヲ論スルニ右四名ニモ廟堂ノ
大臣政權ヲ恣ニシ忠臣ヲ退ケ下人民ヲ苦メ候ハ
木戸大久保ナリト申居候故右人數ニ謀リ共々殺
害ヲ果スヘクト存十一月初旬清島龍太郎自分下
宿ニ来リ候節大久保木戸ノ両参議ヲ殺害可致ト
決心罷在候旨深意相語候処断然同意イタシ其翌
日ト覚ヘ森川篁ニモ自分下宿ニテ同様相咄候処
公意ニ付大ヨリ両参議ヲ殺スニ付テハ其罪條ヲ
記載シ天ニ代ツテ誅戮スル趣意ヲ懐中イタシ度

依テ書面認メ方丹羽精五郎ニ相頼ミ両人ニテ罷
ノ仆條ヲ覚書シ精五郎持帰リ両三日ヲ過キ認メ
持参候間受取置清島龍太郎森川篁等ヘ一見為致
自分所持罷在其後十二月ニイタリ七戸不二郎ニ
モ相咄候処至極公意ニテ共々國事ニ死スヘクト
相巻候間其後書面ヲ一見為サセ公月中旬右三人
外ニ志垣周策公道芝金杉邊ニ遊歩シ森川篁ハ途
中ヨリ他用ニテ帰宿候間四人ニテ同所屋号存セ
サル旅店ヘ相越シ御政体ノ可否談論ノ末参議木
戸大久保ヲ殺害云々決心ノ旨申聞候処異議ナク
同意イタシ候間此上ハ五人ニテ國家ノタメニ身
命ヲ抛ツヘシト夫議シ其夜ハ品川獣肉坐敷ニ登
樓遊興イタシ翌日一公ノモノ自分下宿ニ集會ノ

国立公文書館
National Archives of Japan

処森川筆不参ニ付志垣周策七戸不二郎清島龍太郎等ト両参議ヲ斃スノ計策ヲ議シ候処大久保参議ハ重野某方ヘ時々罷越候趣ニ付途中ニテ斃スヘク尤公志赤懐ヲ遂ケ候上ハ兼テ懐中書所持イタシ居正院ヘ自首シ公裁ヲ仰クヘシト約シ候ヘトモ機會無之十二月下旬ニ相成木戸参議ハ病気ニテ出勤イタサヽン趣畢竟公志人少ヨリ事遲延ニ渉リ残念ト存シ然シハ大久保一名ヲ先ニ殺害可致ト見込最日ノ書面ハ二人ノ名ヲ記シ有之ニ付大久保一名ニ書改呉候様丹羽精五郎ニ相頼且丹羽精五郎ヨリ兼テ刀剣入用ノ節ハ可遣旨承居候処志垣周策儀刀所持無之ニ付十二月二十日頃七戸不二郎志垣周策自分トモ公道内幸町島津久光ノ邸内ニ罷越尤七戸不二郎志垣周策ハ門外ニ為待置濱島正誠ヨリ丹羽精五郎ノ刀ヲ受取門前ニテ志垣周策ニ相渡其後機會ヲ待居候処白川縣士族秋田実十九者自分方ニ来リ過刻大久保参議ノ馬車ニ工部省脇ニテ行逢候旨承リ候間直ニ塙家塾ニ参リ候処公志ノモノ不在故自分一人三田マテ罷越大久保ノ通行ヲ伺候ヘトモ不分明ニ付既宿イタシ然ル処八年十二月二十七八日頃清島竜太郎ニハ叔父某ヨリ是非帰縣イタスヘク申聞ラレ止ムヲ得ス一應岐縣イタスニ付九年一月中迄ニハ必ス出京可致ト申シ譯別ニ及ヒ其後八年十二月三十日頃丹羽精五郎儀大久保一人ヲ斃スノ書面持参呉候間受取七戸不二郎ニ一見イタサ

セ又自分ニハ参議殺害ヲ決心イタサセシヨリ宿
料或ハ處々ニ金借モ有之ニ付若死後ニ至リ金銭
ノ事ヲ以テ汚名ヲ受候モ殘念ニ付金二百圓程周
旋イタシ呉候様中山中左衛門丹羽精五郎両人ニ
頼談候処十一月上旬丹羽精五郎ヨリ金策出来候
趣ニテ金額持参上野不忍池ノ茶店ニテ受取其外
十一月下旬マテ三度ニ金五十圓程丹羽精五郎ヨ
リ受取リ費用ニ遣捨又兄軍次ニ宛遺書一通相認
メ事ヲ果シタル後国元ヘ速ニ遍送イタシ呉候様
丹羽精五郎ニ相託シ且後来ノ見込書ヲ認メ精五
郎ヘ頼置キ然ル後自分ニハ辞世ノ述懐ヲ詠シケ
着用スル下着ニ記載ス其歌ニハ○武士ハモノヽ
フシラテ大君ノ御國ニ國ノ賊ヲ誅セヨ○今ハマ

タ何カ命ノ惜シカラム苔ノ下ニテ御世ヲ詠メン
○大丈夫カ御世安スカレト尽シケリ今日ノ旅路
ハカレシトヤ見ヨ○行先ハ如何ナル里トシラネ
トモ死出ノ山路ハ花ソ咲ラント書並ヘ其下ニ實
ニ天下ニ人ナシ我コレヲ計ル事已ニ四年ニ及ヘ
リ口ニ慷慨ヲ唱フトイヘトモ赤心ノモノ多カラ
ス漸ク今日志ヲ得タリ嗚呼國家安全タル事冥路
安シテ黄泉ノ下ニ大帰シテ楽詠スト記載シ決心
罷在候ヘトモ好機會無之然ル処當一月三日濱御
殿ニテ参議衆ニ天盃下賜ル旨聞及候ニ付七ツ不
二郎ト両人ニテ大久保参議ノ帰路ヲ可待受ト新
橋際マテ罷越彼是聞合候ニ参殿無之趣ニ付空シ
ク帰宿イタシ其後中山中左衛門ヨリ大久保ノ出

入拳動ヲ探索ノ上分明次第報知可致旨中間候間
機會ヲ待居候内本年一月九日被召捕其後大審院
ニ於テ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月八日　手痛ニ付代書
　　印　玉　等　拇印

一木戸大久保ヲ斃ス云々ノ儀ハ中山中左衛門ト共
ニ果スヘクト企意セシニ非ス自分ヨリ中左衛門
ヘ話候処奸臣ナレハ尤ノ説ナリト申セシマテニ
止リ申候
一其後木戸大久保ヲ速ニ果スヘクト中左衛門ヘ相
話候処中左衛門於テモ速ニスヘナレハ速ニスヘ
シト答ヘリ
一森川篁清島龍太郎ヘ木戸大久保両参議殺害ノ儀
ヲ三両度相話候処果シテ罪アレハ斃スヘク同意
イタスヘシト申聞候ヘトモ其後篁モ因循ノ様子
ニ相見ヘ又清島ハ其後帰縣イタシ候
一清島龍太郎森川篁ヘ書面ヲ見セ候処異存無之
一森川篁一人罷越候ハ前日ノ談ハ如何ナリシヤト
尋シニ付全志欠席ノ上ハ決議スル能ハスト申セ
シ処早ク決シ呉ヘキニト申シタレドモ其様子迚
モ頼ムヘキモノニ無之ト見込タリ
一芝酒席ニ於テ志垣周策ヘ相話候節ハ全意イタシ
候ヘトモ清島帰縣必来ハ志垣モ道ルヘキ様子ニ
付是亦迚モ頼ムヘキモノニ無之ト存シ再度ノ書

面モ七戸ハ二郎ヘノミ為見候事

一木戸病氣ニ付大久保一名ニ決スルハ自分ノ心得ナリ

一志垣周策刀所持無之旨ニ付丹羽精五郎ヨリ貰受ケ有之候刀ヲ差遣シ候乃チ殺害ノ用ニ充ル積リナレトモ志垣ヘハ別段其旨ヲ申聞差遣シタル儀ニハ無之

右ノ通リ相違不申上候以上

明治九年十一月八日

兒玉等拇印

愛知縣士族

丹羽氏任第

丹羽精五郎

三十一年二月

一自分儀兼テ華頂宮ノ御懇意ヲ蒙リ罷在候処明治六年十一月中宮ノ命ニ依リ大阪ヘ立越シ謁見イタシ候処九州経歴ノ積リニ付随行可致旨承知イタシ依テ宮ヘ随従九州回歴ノ末暫時鹿児島縣ヘ滞留シ翌七年二月頃宮御帰京ニ随ヒ出京イタシ三田臺町宮ノ邸内ニ寄留イタシ府下ノ形勢ハ勿論方今ノ御國体見聞罷在候処御維新以来未タ確乎タル御國基モ相立サル趣ニテ政令ハ雲ノ如ク相変シ只洋風盛大ニシテ金貨溢出國家次第ニ衰頽ニ趨キ廟堂ノ大臣之ヲ憂慮ニ御政体ヲ一洗シ國家ヲ万世ニ維持セント思慮スル人ハ左大臣

島津久光ノ一人ニシテ憂建白相成候趣モ承知罷
在候処可否ノ勅命ナキモ畢竟奸臣ノ所業ナラン
ト相察シ日夜慨嘆苦慮罷在候折柄鹿児島縣士族中
山中左衛門出京シ因幸町島津久光邸内ニ寄留ノ
趣ニ付固ヨリ中山中左衛門ハ懇意ノ儀ニテ追々
話シニ参リ候処中山中左衛門ニ於テモ当今御政
体ノ非ナルヲ憂ヒ到底一変セサルヲ得ス就テハ
華族ノ内中山従一位其他七八名ハ專ラ島津久光
ノ趣意ヲ貫徹致サセ度只管尽力相成候由ニテ中
山中左衛門儀モ大ニ憤発致是周旋罷在候赴ニ付
今度ハ定テ御政体変革相成ンヘクト愉快ニ存シ
尓後中山中左衛門ト会宿イタシ旦夕國事ヲ議シ罷
在候処鹿児島縣士族濱島正誠儀モ出京イタシ候

ニ付会宿罷在リ其内高知縣士族島卿安度河原塚
茂太郎新潟縣士族三浦清風柿本勤長崎縣士族志
佐要一郎京都府平民山本克中沼精蔵儀モ御國体
ヲ憂慮シ追々中山中左衛門方ヘ集會イタシ彼是
慷慨議論罷在候内朝鮮江華湾ニ於テ我雲揚艦ヲ
彼ヨリ砲撃ノ云々ニ依リ騒然世評モ相立候処ヨ
リ今度征韓ノ令アシハ好機會ニ付公志ト申合大
挙シテ出京ノ上一先ツ方今ノ御國政速ニ御改正
アツテ後チ討征相成リ可然赴ヲ以テ訴迫可及ト
島村安度等ト協議ヲ遂ケ候儀中山中左衛門ヨリ
粗承リ居候ヘトモ中山中左衛門儀鹿児島縣地ノ
会表ヘ報知イタシ候儀又濱島正誠ヲ西京ヘ出立
イタサセ候儀ハ何等ノ故ニ候哉確乎ト承リ居申

サス自分ニハ只管中山中左衛門ヘ隨心依然ト罷
在候処漸次征韓ノ風聞モ穏ニ相成リ然ルニ其以
前ヨリ廣見島縣士族見玉等儀モ折節中山中左衛
門方ヘ相越仝人参リ候節ニ限リ中山中左衛門儀
二階坐敷ニ於テ應接イタシ候ニ付不審ニハ存居
候ヘトモ敢テ尋問モイタサス折柄十月下旬頃ニ
相成リ前書中小從一位以下華族方ヨリ兼テ建言
相成居候儀ハ勿論島津久光ノ建白漸然御採用無
之趣ガ之島津久光ハ辞表ニ依リ免官ノ都合ニ立
イタリ中山中左衛門ハ勿論自分ニ於テモ実ニ落
膽唯茫然ト罷在候処中山中左衛門儀密々申ニハ
前書見玉等ナルモノ仝志ト申合参議木戸孝允大
久保利通ノ両人ヲ殺害可致ト兼テ決心罷在候ニ
付是ヨリ良策ハ無之畢竟島津久光ノ免官モ彼等
両人ノ奸謀ニハ相違之レナク此際ニ至ツテハ急
速ニ事ヲ果サセ候様イタシ度見玉等方ヘ相越シ
猶又彼カ胸中モ相探リ事ヲ促シ候儀ハ勿論穿見
玉等ト申談シ可然用捗イタシ候様承リ候素ヨリ
三條岩倉ノ両大臣ハ名ノミニシテ專ラ政ヲ議シ
事ヲ行フモノハ木戸大久保ノ両人ト兼テ視察罷
在候儀ニテ彼等ヲ斃サント謀ルモノアレハ之ニ
マサル良策ハ之レナク存シ此上ハ精々尽力イ
タスヘクト承諾イタシ尤自分ヘハ疑念ナク示談
イタシ候様兼テ中山中左衛門ヨリ見玉等ヘ打合
置候儀モ承知イタシ其砌見玉等儀ハ通新石町旅
店青木屋小助方ヘ止宿イタシ居候処其後神田柳

町尼屋留次郎方ヘ轉宿イタシ候ニ付追々仝所ヘ
相越シ木戸大久保殺害ノ事件篤ト話シ合ニ及候
処児玉等ニ於テハ屹度決心ノ様子ニハ候ヘトモ
仝志ノ都合モ有之猶豫罷在候趣尤児玉等儀宿料
等多分ニ相嵩ミ殊ニ仝志ノ交リ旁金二百圓程入
用モ有之金策ノ儀中山中左衛門ヘ相談イタシ置
候ニ付仝人ヘ示談イタシ呉候様承リ其趣中山中
左衛門ヘ申聞候ヘドモ兎角急速ニ調金相成兼候
ニ付新潟縣士族柿本勘儀中山中左衛門ハ勿論自
分ニ於テモ別懇ニテ平日形勢ノ議論モイタシ疑
ナキ者ニ付右旁ノ趣柿本勘ヘ申聞金策頼入ルヘ
クト示談ノ上仝人方ヘ相越シ一應相談ノ上追々
催促イタシ候処終ニ調達相成兼候赴ヲ以テ断リ

ヲ受其内中山中左衛門方ニテ調金ニ相成候ニ付
即千金二百圓受取児玉等ヘ相渡シ其後児玉等申
ニハ木戸大久保両人ノ罪ヲ擧ケ天誅ヲ知ルノ趣
意書面ニ認メ懐中イタシ度文義ハ見込認メ呉候
様承リ其罪状ハ第一木戸大久保ニ於テハ政權ヲ
恣ニシテ國家ヲ顧ミス己ノ利スルヲ專ラトシ内
ハ皇族ヲ壓制シ且讒謗律ヲ設ケテ忠諫直言ノ路
ヲ塞キ或ハ無用ノ土木ヲ起シ租税ヲ重歛シテ民
ヲ苦シメ只洋夷ヲ尊敬シ外國ノ交際ヲ漫ニシテ
金貨濫出ノ儀ハ勿論今度島津久光ノ免官モ彼等
両人ノ奸謀ナレハ是モ記載シ然ルヘクト申談シ
依テ右ケ條ノ覚書ニシテ持帰リ其他ノ文義ハ自
分存寄ニ任セ相認メ児玉等ヘ差遣彼是問旋罷在

国立公文書館
National Archives of Japan

候内前書濱島正誠儀西京ヨリ立帰リ鹿児島縣士族上持十之助モ右濱島正誠ト同道出京イタシ候ニ付公宿罷在候処両人儀モ右殺害云々ハ中山中左衛門ヨリ承リ居候趣ニ候ヘトモ兎玉等方相越夫々周旋イタシ候儀ハ無之尤中山中左衛門ハ其頃ヨリ三十間堀町船宿渡世大澤ツナ方ヽ止宿罷在候ニ付兎玉等ノ挙動ハ時々公所ヘ相越報知ニ又居候処中山中左工門ニ於テハ頻リニ事ヲ急キ候ヘトモ已ニ十二月中旬ニモ相成大ニ憤リ稍自分マテモ相疑ヒ候様子ニ候ヘトモ自分ニ於テハ兎玉等ト共々事ヲ果スヘキト約束イタシ居候身ニモ無之候ヘハ公然催促モイタシ難ク又兎玉等ニ於テモ同志ト共々謀ル事ナレハ余儀ナク遅延ノ越ニモ相見ヘ中山中左衛門ト兎玉等ノ中間ニテイテ又方ノ情実ヲ酌ミ量リ兎玉等ヘハ程能ク事ヲ況シ周旋罷在候処終ニ十二月下旬ニ相成然ルニ木戸参謀ハ病気ニテ引籠居候趣ニ付余リ猶豫罷在候テハ其内如何様ノ変相生シ候モ難計此上ハ大久保一人ニ相決シ可然ト兎玉等ヘ示談イタシ候様中山中左衛門ヨリ承リ其趣兎玉等ヘ申聞候処承引イタシ左スレハ暴ニ認置候書面大久保一人ノ名前ニ認ノ直サス候テハ不都合ニ付尚書改ノ呉候様頼ニ依リ認直シ其書面モ中山中左衛門ヘ一應見セ然上兎玉等ヘ差遣シ且自分差料ノ刀ハ不用ニ付入用モノレハ可遣ト兼テ兎玉等ヘ申聞置候処自分留守ノ節兎玉等儀右刀ヲ取

ニ参り公宿濱島正誠ヘ談し持飯り候赴迫ヲ承り
其後更ニ寺申ニハ本年一月三日ハ濱離宮ニ於テ
咎議ヘ天盃下賜ハ赴ニ付其節ハ屹度大久保ノ飯
路ヲ待伏セ積日ノ志ヲ遂ケヽクト公志一同決定
ノ言承り尤児玉等ヨリ見児玉軍沼宛ノ書状一通
差出し右ハ遺言書ニ付事ヲ遂ケ候後底見島ヘ遣
し呉候様頼受ハニ児玉等後来ノ見込ヲ以テ認置
トテ自分心算ニモ相成ヘク為メ遣し候趣ニ付受
取所持イタし居候処右ハ今度御引揚ニ相成依テ
談日ハ決シテ事ヲ果スヘキ儀ト存し罷在候処何
等ノ儀モ無之候ニ付児玉等方ヘ相越尋問ニ及ヒ
候処當日ハ新橋マテ相越し濱離宮ノ模様問合候
処天盃賜り候等ノ御手當ハ全ク之レナキ趣ニ付

大ニ失望イタし候旨承り其旨中山中左工門ヘ申
聞候処其通り探索不行届ノ事ナしハ此方ニテ探
索方巧者ノモノ知己モ有之候ニ付大久保ノ挙動
捜索イタサセ分明次第通知イタスヘク候間児玉
等ヘ打合置候様申ニ付其趣児玉等ヘ申聞置且又
右ノ次第風説罷在候内前書児玉等入用金子中山
中左衛門ヨリ受取児玉等ヘ相渡し置候後尚又金
策ノ儀児玉等ヨリ依頼ヲ受ケ其内一度ハ濱島正
誠、金策イタサセ両度ハ前同様中山中左衛門ヘ
相談ノ上中山中左衛門ヨリ受取児玉等ヘ金五十
圓遣し候尤自分儀モ金六七十圓程中山中左衛門
ヨリ三度ニ貰受遣捨居候処本年一月九日見玉等
儀御召捕ニ相成候趣差知イタし如何様右始末及

露顕候哉様子伺ノタメ所々徘徊罷在候処一月十
六日被召捕其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月一日　　丹羽精五郎拇印

一朝鮮江華湾ノ儀ニ付多人数連合シテ政体ノ改革
ヲ強訴スルヿニハ関係不致候事
明治九年十一月一日　　丹羽精五郎拇印

京都府山城國愛宕郡
第一區鹿谷村農
山本克
二十六年十一月

自今儀京都府士族山本宗親儀ニ有之候処去ル
明治七年四月初旬庶谷村ニ分家農籍ニ入リ四月
十日見込ノ廉有之府廳ニ宛上書ニ及候処其筋ヘ
可差出旨御指令ニ付直チニ右見込書帝都御確定
其他ノ件條ヲ掲載シ郵便ヲ以テ左院ニ差出シ四
月下旬郷里ヲ出発東京ニ罷出西小川町一丁目十
三番地北白川ノ宮殿借邸内ニ寄留イタシ六月二
十七日御政体其當ヲ失シ候為左院ニ建言
ニ及候処御規則ニ觸ル趣ニヲ保月相成ラズ七月
五日下ケ渡ニ付イタシ方無之一應八月四日飯郷
翌八年一月三日郷里出立薩州鹿児島ニ遊歴四月
中飯郷イタシ候得共兎角國家ノ衰頽ヲ憂ヒ吾家
ニ黙止スルヿ忍ビス公月中又々東京ニ出ヲ所々

止宿其後品川本宿三丁目小川屋ヘ下宿イタシ六月中ヽ覺ベ廟堂ノ三條岩倉二大臣共參議ニ於テ政ヲ恣ニシ國ヲ誤リ外患ヲ釀成スル事其罪処カヲツテ御政体御改革相成度旨元老院ヘ建言ニ及ヒ候処十三日間程御留置ニテ是亦採用相成ラス到底一人ノ力及ヘキニアラス依テ諸縣ヨリ出京イタシ居候有志ノ者ト深ク相交リ九月上旬ト黄河原塚茂太郎島村安度中沼精藏寺田龍太郎津隈宏書ヨリ今般華族方建白ノ趣意御採用相成度旨三大臣ニ建言イタシ度ト談有之然レドモ自分ニハ曩日ノ建言モ有之ニ付公意ニ候ヘドモ連名ハ除キ呉候様相断其後九月下旬朝鮮江華湾ニヲイテ我軍艦ニ砲撃ヲ加ヘタル段御布告ニ付公志河原塚茂太郎島村安度中山中左衛門中沼精藏ト相議ス今内國衰頽人民厭セサルハ内閣奸臣多キニ因ル依テ右奸臣ヲ除キ然ル後朝鮮征討ノ可否ヲ論スヘシ実ニ猶豫ノ時ニ非ス付テハ四方ノ公志ニ謀リ朝鮮失辞ヲ出願シ人數出京ノ上大挙シテ朝廷ニ迫リ三條太政大臣岩倉右大臣參議木戸大久保大隈伊藤等ヲ誅戮シ御政体ヲ大改革イタシ申スヘクト謀リ既ニ河原塚茂太郎ハ高知縣ニ帰リ公志ニ議スルノ都合ニイタル然レ氏朝鮮ノ事ヤ大臣ヲ御遣シ相成征討確定トモ察セラレサルヨリ荏苒罷在候処側ニ聞ク中山中左衛門儀兎玉等ト謀リ我ハ人ニ在リ其人ヲ除ケハ必然改革可相成ト依テ木戸大久保ノ両參議ヲ刺殺スル

案ヲ運ス遂然ハ朝鮮ノ事件ト内閣ノ変ト何レカ
遠カラス起ルヘシ其機會ヲ待大拳シテ朝廷ニ迫
リ素志ヲ貫ヌクヘシト形勢ヲ伺ヒ滞京罷在候処
本年一月九日御拘引相成其後大審院ニ於テ御吟
味ヲ受ケ候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月六日　山本克　拇印

高知縣士族
島邨安度

二十八年六ヶ月

一自分儀當庁下形勢見聞イタシ度且親族内田孝作
ニ用向ニ有之昨八年四月中出京処ヲ止宿ノ末神
田銀町一丁目川島久兵衛方ヘ七月中ヨリ下宿罷
在諸縣有志ノ者出京イタシ居候故相交リ互ニ形
勢ヲ討論シ素ヨリ自分見込ニ於テハ當時御政体
不相立外國交際ノ不規則ヨリ金貨濫出ニ至ルヲ
憂ヒ罷在候処曩ニ從二位島津久光ノ建言又中山
從一位外華族七名ノ建言等ヲ聽聞スルニ実ニ至
當ト存シ九月下旬ト覺エ河原塚茂太郎津隈宏中
沼精藏寸田龍太郎自分共申合右八華族建言ノ趣
御採用相成度段三大臣ヘ建言ニ及ヒ其後三條太
政大臣ニ面謁シ金貨濫出ノ弊ヲ論シ候処採用相
成ラス其他諸有志ノ上書建言モ同様採用之レナ
ク兎角廟堂ノ御改革無覺束ト存居候処其際朝鮮
ノ我軍艦ニ砲撃セシ云々御布告ニ相成此ニ於テ

全志山本元中沼精蔵中山中左衛門河原塚茂太郎
ト商議スルニ朝鮮征討ヲ好機會トシ平素ノ志ヲ
遂クヘク就テハ朝鮮討ツヘキノ添状ニ先鋒ノ義
連名出願シ然ル後人數出京ノ上御政体ノ改革有
之度旨人衆ニテ朝廷ニ迫訴イタスヘクト決議シ
已ニ十月中河原塚茂太郎ハ在縣ノ同志ニ謀ルヘ
クト申合セ高知ヘ帰縣イタシ候併シ方論ニ同意
ノ士甚少ナキ旨書状上ニテ茂太郎ヨリ申越候処
ヨリ引續十一月初旬小笠原和平出京イタシ候間
全人共ニ中沼精蔵ト再議シ目今ノ形勢猶豫停視
スヘカラス然レトモ朝鮮征討ノ有無未タ判然不
致就テハ鹿児島縣内田政風ニ謀ルヘクト存シ同
人方ヘ小笠原和平身分両人参リ今日政府其當ヲ

失シ候ニ付有志ノ徒之ヲ憂ヒ建言ストイヘドモ
採用之シナク到底人衆ヲ募リ闕下ニ迫訴シ三條
岩倉二大臣及ヒ諸參議ヲ黙ケ島津久光ヲ復職御
用ヒ有之様申立度旨ヲハ鹿児島縣ノ全志ト相謀
リ呉候様示談ニ及候処内田政風ニハ海江田武次
ト既ニ元老院ヘ建言ノ趣モアレハ全意難致ト申
ニ付空ク帰宿然レトモ黙止スルニ忍ヒス尚又十
二月下旬鹿児島縣川畑伊右エ門小笠原和平ト隔
田川ニ遊ヒシ時内田政風ニ論セシ通リ川畑伊右
衛門ニ相謀リ候ヘトモ承引イタサス尤其前十一
月上旬中山中左衛門方ヘモ相越右ノ旨意相謀リ
候処全人申ニ政ハ人ニアリ其人ヲ除クヲ上策ト
又依テ彼是見込候所柄見玉等参大憤発ニテ木戸

大久保ノ両叅議政權ヲ恣ニス依テ此両人ヲ殺害
可致旨漸然申ニ付謀議相決セリ只今ニ至版縣全
志ヲ募ルニハ公意イタシカタキ旨申聞候間右ノ
趣即チ山本克中沼精蔵小笠原和平ニ相話シ猶朝
鮮征討ノ令下ル等ノ機會ヲ待テ帰京罷在候処本
年二月一日御拘引相成其後大審院ニ於テ御吟味
ノ受候事
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月六日　島邨安度　拇印

高知縣士族
小笠原和平
三十四年

一自分儀兼テ御國体ノ確乎致サヽンヲ憂ヒ苦辛罷
在リ縣地ニテ全志ト國家変アル節ハ必ス名義ヲ
正シ尽力イタシ度ト議シ全志ノ者ヒ追々出京イ
タシ居當時ノ形勢ヲ互ニ通報罷在候然ルニ河原
塚茂太郎兼テ出京ノ処昨八年十月中帰縣イタシ
事情承候ニ東京ニ在ル諸縣ノ全志ト議シ候ハ當
時外國交際ノ不規則ヨリ金貨溢出國家日々ニ衰
弱シ且人民ニ於テハ疑懼命令ヲ遵奉セス依テ諸
有志上書建言ニ及フトイヘトモ規則ニ觸ル申ヲ
以テ採用不相成如何ニモイタシ方無之処明治八
年九月中朝鮮江華湾ニ於テ我雲揚艦ニ砲撃イタ
シタル段御布告ニ相成然ルニ内國人心洶々内閣
奸臣多シ依テ前ニ内ヲ治メ後ニ外征ニ及ハズン

ハ國家危急ニ陥ルヘシ此機會ニ乗シ公志申合セ
朝鮮先鋒ヲ出願シ其後人數出京大擧シテ朝廷ニ
迫リ御政体大改革ヲ建言可致ト已ニ鹿兒島縣ハ
中山中左衛門引受有之旨甲ニ付公志ニハ候ヘトト
モ少シク疑念ノ所モアレハ自分一先上京實地ヲ
見聞イタシ可申ト縣地出立十一月七日東京着島
邸安度其他ヘ形勢聞合候処島津左大臣其板垣參
議免官ニ相成朝鮮事件ハ其後ノ模様モ判然不致
併今日ノ形勢猶豫スル時ニ非ス到底最力ヲ以テ
内閣ノ御改革ヲ建言スルヲ上策トシ島村安度中
沼精藏ト議シ公十一月中内田政風ニ面會イタシ
公志ヲ募リ大擧シテ建言スヘキ旨相謀候処公人
ニハ海江田武次ト申合セ元老院ニ建言イタシ居

候ヘハ公意イタシガタク旨申聞候其後川畑伊右
衛門出京イタス趣尤公人後ハ老功ノ人ニ有之趣
煎ヲ承及ヒ候ニ付上京ノ上ハ面會ノ積ニ有之候
処十二月下旬川畑伊右衛門自分旅宿ヘ尋參リ候
ヘトモ其節ハ委細ノ話モ無之相分シ其後島邸安
度自分両人ニテ川畑伊右衛門旅宿ヘ相尋候処公
人儀ハ元老院ヘ建白致スヘシ見込ノ趣承リ候其
後山本克公道品川宿貨坐屋ニ罷越候処雜
談ニ付談モ出来其翌日山本克川畑伊右ニ門自
分旅宿ヘ罷越候処右旅宿ノ儀ハ船宿ニ付船ニテ
隅田川邊ニ出遊魚ヲト申料理屋ニテ對酌イタシ
候ヘトモ是又別段相談モ無之候其前十一月中島
邸安度ヨリ鹿兒島縣ノ兒玉等ナルモノ國ヲ憂ヒ

国立公文書館
National Archives of Japan

木戸大久保ノ両参議ヲ驚ス ト大憤発罷在候甫密
ニ承知候間右様ノ軽挙イタシ候モノヲレハ自分
共策ノ妨ケト成ヘクト存候ヘトモ見玉等ハ一面
會モ無之者ニ付差止メ候事モ難出来其後見玉ノ
心中如何ト存島邨安度ニ聞合候ヘハ真ニ決心イ
タシ止ムヘキ勢ニ無之趣申聞候ニ付自分儀ハ機
會ヲ相待候心得ニテ滞京罷在候処九年二月一日
御拘引相成其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受ケ候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月六日

小笠原和平梅印

別紙口書相違ノ廉

一内閣奸臣多シト申スヿハ警視廳ニテ申立タル覚
無之

一兼テ建言シタキ旨意ハ金貨濫出内地人心洶々ト
シテ居リ合ハサルヲ憂ヒ居リ候ニ付テノコトナ
リ

一河原塚茂太郎歸縣ノ上承リ候ハ朝鮮征討ノヿノ
ミニテ其他前後ノ儀聢ト覚無之

一自分上京ハ河原塚茂太郎飯縣前ヨリノ心組ミナ
リ

一川畑伊右衛門ヲ尋ネ候ハ久間直熊ト仝道シタル
ヿニシテ島村安度ニ無之

一内田政風ニ話セシハ大挙シテ朝廷ニ迫ル等ノヿ
ニ非ス鹿児島縣ニテ有志輩建言スヘキモノ有之
由中沼精蔵ヨリ承リタルニ付右ヲ尋ネニ参リタ

ルナリ勿論中沼精蔵ト議シタルモ無之

一諸縣有志建言スト雖トモ規則ニ觸ルヽ旨ヲ以テ採用不相成トアレトモ右規則ニ觸ルヽト申スハ承リ不申唯諸有志ノ建白採用不相成旨ハ承リ居レリ

一大警シテ朝廷ニ迫ル等ノハ素々覺無之全志ト申合セ幾重ニモ建言スヘキ心得マデナリ

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月六日　小笠原和平　㊞

別紙口書相違ノ廉

一茂太郎帰縣ノ節朝鮮ノ一條ハ茂太郎秀ニテモ黙止スヘキ儀ニ無之全志ト共ニ建言スヘクト申スニ付是迄ハ自分モ全意シタレトモ未タ堅約ハイタサス一先出京ノ上形勢ヲ見聞シタル上ノ心得ナリ

一中山中左衛門廉見島ヲ引受云々ト申スハ茂太郎ヨリ承リ不申又中左衛門トハ一面會モ無之モノナリ

一自分出京左大臣島津参議板垣免官ノ儀ヲ安度ヨリ承リタリトアレトモ右ハ業足達中神戸ニテ朝野新聞ヲ一覧シ其節承知シタリ

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月六日　小笠原和平　㊞

新潟縣士族

三浦清風

四十一年

一自分儀明治五年十月中田主溝口直正ニ用向有之出京芝烏森町一番地寄留其後旧主會計向擔當罷在候処仝七年十一月中直正九州筋經歴ノ節隨行イタシ鹿児島縣ニテ罷越翌八年四月中帰京其後前ニ取扱候會計向取調中再ヒ烏森町ニ寄留罷在候然ルニ前年鹿児島縣ニテ知ル人ニ相成ル中山中左衛門儀八年夏中出京尓来互ニ往来シ御政体ノ儀ヲ討論シ自分ニ於テハ從二位島津久光ノ建言ヲ是トシ罷在候故仝年九月中見込ノ次第大蔵省御改革ノ仝條ヲ記載シ三條殿マヲ建言イタシ

候処家令ニテ取置ニ相成其後何等ノ御沙汰無之其頃中山中左衛門ニハ旧主島津久光ノ建言ヲ貫度ト頗ル用旋ニ渉リ候ヘトモ採用有無判然イタサヽル折柄九月下旬朝鮮江華湾ニテ我軍艦ニ砲撃ノ云々御布告ニ相成其砌中山中左衛門方ヘ尋參リ候処仝人申聞候諸縣ノ有志數多建言ストイヘドモ採用相成ラス今般征韓ノ令下ルヲ好機會トシ仝志ヲ募リ表ニ先鋒ヲ出願シ人數出京然ル後衆力ヲ以テ政府ニ迫リ御改体ノ改革ヲ申出ヘシト申ニ付素ヨリ今日ノ御政躰不服ナレハ同意イタシ其節家事ノ儀ニ付縣元ニ用向モ有之旁幸ト存シ十月上旬帰縣寺田政也其外二三名ヘ面會シ密謀ノ儀ハ不相語候ヘトモ朝鮮ノ儀如斯御布

告ニ相成ニ付テハ有志甲合先鋒ヲ出願可致自分
東京ヨリ探知次第差支無之様申談置仝十一月中
出京之ヨリ中山中左衛門宅ニ相尋候処仝人儀中
ニ参議木戸孝允大久保利通ノ両人當時専ラ政権
ヲ擅ニス此両人ヲ殺害セハ必定政体改革ノ目途
可相立ト決心シ人数ニ撰ヒ折角手配中ナレ氏未
タ仝宿ノ者ヘモ咄不致候間必他言イタス間敷旨
承知イタシ其後十二月二十日過ヒ覆工三十間堀
町船宿渡世兵庫屋方ヘ中山中左工門参リ居候ニ
付相尋候処自分ヘ探索ノ事相類度候ヘトモ此場
ニテハ咄致兼候ニ付近日自分宅ヘ出向候間山本
文之助呼寄セ置候様依頼ニ付承諾イタシ其後自
分宅ヘ中山中左衛門参リ候ニ付山本文之助ヲ招
キ候ヘトモ其来ル遅キニ付中山中左工門ハ待チ
兼候宅具跡ニ山本文之助参リ候間自分ヨリ大久
保利通ノ遠足或ハ出入ヲ探索ノ上報知イタシ呉
候様大累相咄置然ル処其後中山中左工門ヨリ右
探索ノ儀報ヲ見合候様山本文之助ヘ申遣呉候様
書通有之候ニ付其旨通達イタシ置候処當一月七
日再ヒ探索相頼ヒ度赴申越候間山本文之助ヲ中
山中左衛門宅ヘ差遣候後動静窺居候処本年一月
七日御拘引相成其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候
事

右ノ通リ相違不申上候以上

明治九年十一月二日

三浦清風栁印

太政類典

長崎縣士族

志佐要一郎

三十五年十一ヶ月

一自分儀明治六年五月中當府下形勢見聞ノタメ仝縣士族田村成之外二人仝伴出京向柳原町二丁目一番地松浦從四位邸内ニ寄留イタシ居候処仝年中田村成之外二人ハ追々帰縣自分一人滞京罷在然ル処翌七年一月中肥前佐賀ニヲイテ暴挙有之鹿児島縣旧知事モ既縣相成候趣承知イタシ候間動静伺度ト存シ仝月中出立鹿児島縣ニ罷越仝縣士族中山中左エ門五代競太其外数名ヘ懇意ニ相成リ佐賀ノ模様モ承知仝四月中東京ニ帰リ前書

松浦邸内ニ寄留罷在然ル処翌八年夏中中山中左衛門出京イタシ又高知縣河原塚茂太郎島邨安度京都府山本克中沼精蔵愛知縣丹羽精五郎トモ相交リ互ニ往復當時ノ形勢ヲ論シ素ヨリ自分見込ニ於テハ今日ノ御政体ヲ見聞スルニ外國交際ノ不規則ヨリ金貨濫出終ニ大蔵ノ欠乏ニイタル又人民ハ汲々トシテ不和ヲ懷キ命令ヲ違背ス是則廟堂ノ大臣私権ヲ逞フシ政ヲ擅ニスルヨリ國家危急ヲ招クニイタル諸有志之ヲ憂ヒ上書建言ニ及ヒイヘドモ採用相成ラス前年從二位島津久光建言ノ如キ誠ニ至當ト存候ヘトモ是以採用有無判然不致候ニ付何卒政体ヲ一変セントト苦心憂慮罷在候処九月下旬朝鮮江華湾ニ於テ我軍艦ニ砲

擊セシ云々御布告ニ相成其頃島村安度河原塚茂
太郎中山中左衛門中沼精藏山本克ト會シ斯ノ如
ク内國人心洶々政府其當ヲ失シ外患ノ到來スル
実ニ歎息ノ秋ナリ然レトモ微力ニテハ毀シ方無之
到底衆力ヲ以テ迫ル人々併平常多人數出京モ嫌
疑ヲ恐ル然ハ朝鮮征討ヲ好機會トシ企志ヲ募リ
先鋒ヲ出願シ人數出京御政体ノ改革ヲ朝廷ニ迫
リ申ヘクト中山中左衛門或ハ島邨安度宅ニテ議
シ已ニ河原塚茂太郎ハ高知藩ノ企志ニ謀ルヘク
ト帰縣又月分ニモ長寄縣ニ累在企志安東藤二今
井肇ヽ前除申遣シ候ヘトモ企意イタサヽル旨回
答有之然レトモ自分ハ確乎ト前議ヲ是トシ機會
ヲ待居候処島津左大臣免官ニ相成又一層ノ憂苦

ヲ加ヘ候間中山中左衛門ニ咄合候処中左衛門申
聞候ニ政ハ人ニ在リ木戸大久保ノ両参議政權ヲ
擅ニス依テ兒玉等其外ノモノ大憤発両参議ヲ暗
殺セント謀リ居ル同意イタシ候旨申ニ付自分
ニハ斯ノ如ク輕擧ニテハ如何ト存候ヘトモ其後
モ屢々承候間島村安度ニ吉ノ咄イタシ且丹羽精
三郎ヨリモ中山中左衛門ヨリ申聞クル通リ兼知
イタシ候間不遠朝鮮征討カ又ハ内閣ノ変動カ何
レカ起ルヘシト存シ形勢ヲ伺ヒ事変到来セハ素
志ヲ可遂ト滞京罷在候処本年二月七日御拘引相
成其後大審院ニテイテ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月四日
志佐要一郎 拇印

東京第五大區八小區
淺艸北田原町三丁目
十二番地
平民
山本文之助
當十一月六十三年七月

一自分儀旧幕臣ニ有之候処御一新ノ節平民籍ニ相成尔来開版物渡世罷在候ヘトモ平素德川慶喜ノ再奉職相成候様志願ニテ旧新発田藩三浦清風氏柿本勤等ニハ兼テ懇意ニ付追々咄合モイタシ相交居候処昨八年夏中三浦引合ニテ鹿児島縣士族中山中左衛門ニ面會此者儀ハ左大臣島津久光ノ側役相勤候モノニテ德川家ノタメニ種々深切ノ

談話モ有之其後打絶面會モ不致候処十二月下旬三浦ヨリ参リ呉候様申越候ニ付廿八九日頃ト覚三浦方ヘ参リ候処全人中間候ニ中山中左衛門儀大久保参議出入ノ儀ニ付探索相頼度趣ニテ過刻マテ待居リ候ヘトモ飯宅イタシ取早余日モ無之候間来一月十日前マテニ委細中山ヨリ頼談可有之何レ自身ニ被成候事ニテ有之間敷可然者ヲ撰シ引付ケ候方ニ可有之トノ事ニテ三浦ハ持病ノ痔鼻ニテ言語分リ兼候ト申シガタク候ヘトモ委細中山ヨリ頼談可有之トノ事ニ付其ママ打過當一月五日一両日ノ内参リ呉候様御示申参リ七日ニ年始ヤカテ三浦方ヘ罷越候処今日中山ヘ引合差支無之旨及答候処三浦

取計ニテ中山在宅ノ有無問合ニ遣シ間モ無ク鹿
児島縣士族土持十之助参リ中山ハ芝新銭座町ニ
居リ候間業内可致旨ニテ土持ニハ初テ面會仕人
仕道仕所ヘ罷越シ中山ヘ面會イタシ候処肥後米
十五万石程四圓程ノ相場ニテ買入候ツモリニ付
可然望ノモノ世話イタシ呉候様外ニ探索物ノ儀
相頼申度右ハ大久保一蔵ノ遠足イタシ候欤又ハ
下屋敷等ヘ罷越候様ノ事入用ノ儀有之候間手配
イタシ分明次第報知イタシ呉候様尤委細ノ儀ハ
追々相談可致候ヘトモ今日ハ何モ不申以心傳心
ト心得候様申聞二十日頃マテニ手配行居候哉ト
ノ事ニ付随分手配可相成ト答候迄ニテ直ニ酒杯
差出候間一二杯振舞ハレタル景ニ付差急キ敗宅イ

タシ得ト勘考及ヒ候処昨年夏中面會ノ節久光ノ
事ニ付大久保ヘ面會厳シク申談度候ヘトモ久々
疎遠ニイタシ候故一ト通リノ面談ニモ参ル間敷
ト面倒故其日其日ト延引イタシ居候旨申聞候儀
モ有之候間下屋敷其外遠足ノ様ニ寄リ出先ヘ
仕寄セ候趣向ニテ可有之欤久光ノ一條ニ付外々
ノ昔モ建白抔イタシ候末大久保ヘ迫リ結局以後
絶交ノ談判ニ相成候望ノ水沙汰モ有之候間イツ
レ差迫リ候節ニ可有之候ヘトモ外々ノモノト違
ヒ中山ノ生質ニテハ詰リ絶交位ニテハ為済申間
敷仕儀ニ寄双方ノ沙汰可及モ難計其趣向ノ為出
先ヲ承リ候事ニ候ハヽ容易ニ報知モイタシ遣シ
ガタク其外種々疑惑モ生シ候間手配ノ談判トシ

テ罷越中山ノ底意得ト為リ万一過激ノ節ニ候ハ
ヽ昨年中中山三浦自分三人談話ノ節水府ノ時ヨ
リ風ト暗殺論ヲ発シ久光一除モ暗殺ナド用ヒ候
ヘハ譯モナキ事ニ候ヘトモ左様ノ節ハ縦々ノ為
ニモ不宜候間決テイタス間敷事ノ趣中中正論ヲ
ツクシ三浦ハ素ヨリ誠実ノ氣風ニ付久光ノ徳ニ
サハリ候旨申シ候事モ有之候間丈其ノ儀ヲモツ
テ説得ノ致シ方モ可有之若不聞入候ハヽ聞入サ
ルトキハ永計方モ可有之ト決着イタシ候処十日
十一日ノ大雪ニテ段々延引同十三日内幸町島津
邸内中山方ヘ罷越候処未タ新銭坐ヨリ立返不申
候旨ニテ濱岡正誠ニ初テ面會仝人案内ニテ新銭
坐ヘ参リ候処折節客来有之坐敷モ差支候間次ノ
間ヘ呼出シ大久保一條ノ儀仝人ヨリ妾ハ西京ノモ
ノニテ懇意ノ婦人両三人當地ヘ出居リ手寄リモ
有之候間其者ヨリ遣ヒ候方可然候ヘトモ婦人ノ
事故入用モ多ク懸ルヘク御者別當ノ類ヲ遣ヒ候
方直安ノ代リ承リ落モ出来可申必用ノ事ニ候ハ
ヽ両様トモ遣ヒ候方ニ可有之哉ト申談候処其一
條ニ付両三日大取込ノ儀出来候間今タハ三浦ヲ
以テ断リヲ可申入ト存居リ候処ニ有之夫ニ付明
後十五日十六日ノ内ニ向島ヘ出張得ト談判イタ
シ候儀有之候間十五日十六日ノ内ニ濱岡ヲ以イ
ツヽヘカ出張ノ儀可申進候間其節面談再ヒ相頼
可申旨ニ付外可談筋モ無之候間丈マデニイタシ
坐敷ヘ通リ客ハ知ル人ニ付面會客ト仝道飯宅三

浦ヘハ中山頼ノ儀十五六日ノ内ニ委細全人ヨリ
承リ候積リニ付十七日ニ三浦ヘ参リ候間昼前在
宿候様申遣シ十五日十六日トモ中山ヨリ何ノ沙
汰モ無之候間十七日ニ三浦ヘ参リ中山ヨリ何カ
不申越哉ト承リ右七日十三日中山ヘ引合候趣ノ
大略ヲ話シ候処三浦申聞候ニハ中山ハ十四日ニ
警視廳ヘ被呼出拘留相成中山ノ手許ニ居リ候見
込ト申ス者八日頃被召捕丹羽ト申者嚴敷尋中ニ
有之中山ノ大取込ト申候ハ此儀ニ可有之尤中山
ハ無程可相済由ニ承リ候間帰リ次第早速可申遣
旨ニテ右名前其外等モ初テ承知イタシ其後来ノ
儀ハ三浦方ニテハ持ニ承リ候処實事ノ儀ニ付延
日書付可差越趣ニ約束イタシ探索一條ニハ中山

ノ存慮承リ掛ケ不申候内二月一日自分儀モ警視
廳ヘ被呼出一ト通リ尋ノ上公月二十七日當御院
ヘ被引渡御吟味ニ付警視廳於テ申立候趣取来ル
右始末有体奉申上候事
但シ柿本ヨリ丹羽ト申者ヘ大久保出入ノ儀自
分ヨリ報知次第可為知約束イタシ候由右ハ三
浦ヲ差置柿本ヨリ探索向抔自分ヘ可頼謂シ無
之十二月下旬ヨリ一月初旬三浦面會ニ付柿本ヲ
使ニ差越候間中山ヨリ頼ニナリ候儀ヲ心得居
リ支ヲ日的トイタシ丹羽ヘ約束イタシ候哉難
計探索ニテ無之右出入ヲ自然聞込候事モ有
之候ハヽ為知呉候様ノ頼モ可有之哉ト考候ヘ
トモ更ニ支障ノ覚ヒ無之警視廳於テ尋ノ節モ

其通リ申立候事ニ御坐候

右相違不申上候以上

明治九年十一月二日　　山本文之助　㊞

鹿児島縣士族

濱島正誠

二十九年十一ヶ月

一自分儀明治七年三月三日教部省ニ於テ奈良縣下大倭神社少宮司兼權大講義拜命奉職罷在候処翌八年三月中少宮司ヲ辞職仝月中飯縣ヘ帰ル八月中又々宮司志願ニテ再ヒ出京内幸町五番地從二位島津久光邸内ニ中山中左衛門寄留罷在候間仝宿イタシ候処愛知縣丹羽精五郎高知縣島邸安政

京都府中沼精蔵其外諸縣ノモノ中山中左衛門ヲ尋糸リ自分ニモ追々懇意ニ相成其頃中山中左衛門ニハ旧主島津久光前年十四ヶ條ノ建言御採用相成候様存込事ヲ周旋イタシ居候折柄九月下旬朝鮮江華湾ニテ我軍艦ニ砲撃セシ云々御布告ニ相成其後島邸安度中沼精蔵其外数名中山中左衛門方ニ相集リ當時御政体不相立ヨリ國家衰弱シ人心洶々トシテ命令ニ違背ス諸有志之ヲ憂ヒ建言最通ニ及フモ採用無之如斯時勢ニシテ外患ノ起ル實ニ國家危急ノ秋ナリ依テ仝志ヲ多ク募リ朝鮮先鋒ヲ出願シ人數出京ノ後人衆ニテ御政体改革ヲ朝廷ニ強訴スヘシト議論決シタルニ付中山中左衛門ニハ西京ニアル仝縣士族高島六三西

京人板倉槐堂等ニ通シ度越又因州人河田作馬ニ
ハ兼テ有名ノ士ニテ且池田慶勝ハ八葉族中ノ一
人ニシテ其砌尽力相成候ニ付河田作馬ハ右池田
慶勝ヘ旧主ノ縁故モ有之上京イタシ候ハヽ尚更
国蔵ノ都合モ然ルヘク候ニ付至急出京ヲ促シ度
ト申ニ付然レハ自分西京ニ用向モ有之可罷越ト
相談イタシ候砌仝縣士族林忠左衛門儀出京イタ
シ居此者ハ元中川宮ニ付添罷在候者故仝行イタ
シ同宮ニ御上京ヲ可伺ト十月中旬中山中左工門
ヨリ旅費金四十圓受取リ出立西京ニ罷越候処右
宮ニハ御出京無之旨ニ付高島六三板倉槐堂中沼
良蔵等ニ面會右夫議ノ次第臣細申聞候処板倉槐
堂ニハ大和十二郡ノ内仝志モ有之且十津川ハ尤

有志モ有之ニ付委細引受可申旨相答高島六三ニ
モ承諾イタシ候間河田作馬ヲ尋中山中左工門ヨ
リ傳言ノ趣速ニ出京有之度段申聞候処迷々出京
可致旨答ニ付相別レ其後板倉槐堂方ニ参リ浪華
在京ノ仝志輩殊ノ外金ニ乏シク差支候旨相咄候
処千圓ノ証券二枚取出シ是ヲ以テ大蔵省ノ官員
ニ右合受取候ヘハ一時融通不苦ト申ニ付相頼リ
外ニ金五十圓借受滞留罷在候内左大臣島津久光
免官ノ趣相聞候間不取敢仝十一月中帰京イタシ
中山中左工門ニ面會候処児玉等ナルモノ大久保
利通ノ両参議ヲ皆殺可致ト謀居候趣就テハ自分
ニモ其心得ニテ可罷在旨中山中左衛門申聞候ニ
付承諾イタシ居候然ル処十二月下旬児玉等ヨリ

金十五円貸呉候中山中左衛門ヘ依頼イタシ候処
中左衛門ニハ持合セ金子無之旨ニ付仝縣人佐多
直八ヨリ借受内十四円丹羽精五郎ニ相渡シ仝人
ヨリ児玉等ヘ相渡申候尤中山中左衛門自分両人
ノ名前ニテ佐多直八ヨリ借用イタシ候儀ニ有之
其後九年一月十三日山本文之助ト申モノ中山中
左衛門ヲ尋参リ自分初テ面會夫ヨリ紫内イタシ
芝新銭座町中山中左衛門方ヘ相越シ面會為致尤
中山中左衛門ヨリ大久保参議出先探索ノ事ヲ山
本文之助ヘ頼ミ置タル由ニ有之候自分ニハ内幸
町島津久光邸内ヘノ飯路御拘引相成其後大審院
ニ於テ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月一日

濱島正誠 拇印

一中沼良蔵ヘ面會ノ節征韓ノ儀ハ不申聞候事

明治九年十一月一日

京都府管下
山城國愛宕郡淨土寺村
農
良蔵長男
中沼精蔵
三十一年六ヶ月

一自分儀在所ニ於テ平素漢学生徒教授罪在候処当
今ノ如ク金貨濫出候テハ追々國ノ衰頽ニモ可立
至ト推察シ建言可致ト存シ昨八年一月十日西

京出立仝月廿八日頃東京三田四丁目九番地高橋
傳一郎方ヘ着程ナリ日吉町十番地吉田正義方ヘ
止宿仝月下旬蛎殼町一丁目八番地佐藤清藏方ヘ
轉宿七月中金貨輸出ノ義ニ付建言書相認メ元老
院ヘ二申候処仝院御改革中ノ由ニテ御採用有無
御沙汰無之目下尚時勢ヲ熟察イタシ度ト存シ滯
京罷在候内御政体変革ノ義ニ付八華族ヨリ建言
ノ次第モ有之趣承リ河原塚茂太郎寺田龍太郎島
村安度外一名相談ノ上右建言御採用相成度段三
大臣方ヘ上申イタシ置其後江華湾一條報知相聞
ヘ候項一日河原塚島村両人富所ヘ相越候処酒人
ヨリ申聞候ニハ昨日中山中左衛門訪来リ江華湾
一條ニ付我豊両人ヘ相談有之其趣意ハ既ニ彼ヨ

リ事ヲ発シ候上ハ此度ヨリ万々不可止勢ニテ是
非問罪ノ師ヲ出サネハ國威不相立就テハ我邦ニ
於テモ從軍先鋒願出候ハ當然ノ儀ニ候ヘトモ今
日ノ如ク國用多ニテハ平常ニテモ國力難堪況シ
テ外征ノ師ヲ起シ候テハ巨費測ラレス實ニ不堪
寒心次第不去是ニテノ通リ一人二人ノ建白ニテ
ハ迚モ廟議ヲ揺ク人ニ足ラス付テハ鹿児島縣有
志ノ徒ヲ始メ諸縣有志ト相謀リ協議ノ上衆議ヲ
以テ政府非常ノ大改革有之度段申立度旨仝意
イタシ呉聞敷ヤトノ相談ニ付粗仝意致シ置候如
何相考候ヤトノ事ニ付自分ニモ至極尤ノ儀ト存
候間仝意可致旨相答候河原塚茂太郎ハ家事向ニ
付兼テ此頃飯縣ノ用意有之旁右ノ事情仝意ノ徒

ハ新知ノタノ無程歸縣イタシ候其後内閣動揺大臣參議辭職ト相成右相談イタシ候一條全ク見込相分ン能念イタシ候其後見込其本ヲ大久保ノ兩參議ニ可及狙撃決心罷在候由中山中左衛門中居候趣島御安度ヨリ筋カニ承リ候其後長々ノ滞在ニテ家事故郷百端不都合ヲ生シ候ニ付一ト先西歸可致ト存シ文々一別ヲ告ケ候処引留ノ異候者モ有之且ハ朝鮮琉球事件何レモ文那ニ關渉候趣為リ候ニ付万一事破レ禍結候トキハ不容易大事件ニ付今暫時乞ヲ聽察イタシ度ト存シ尚滞在罷在候処小笠原和平島村安度志佐要一郎山本克巻ト時々往来時事憂慮ノ余何トカ尽力ノイタシ方無之ヤト種々相談イタシ候ヘトモ一モ目途相立不申若萬遂日遂ニ昨年モ相暮レ家早滞在イタシ候テモ何ノ詮モ無之且ハ費用ニ差支候ニ付本年一月中旬頃ハ愈西飯イタシ度心組ニテ組文度罷在候処中山中左衛門始メ交游中ノモノ共文々御拘留相成候ニ付共際ニ當リ発程イタシ候テハ逃遁ノ姿ニ相成却テ御嫌疑ヲ来シ可申ト存シ猶豫罷在候内二月一日御拘引相成リ其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候事

右ノ通リ相違不申上候以上

明治九年十一月七日

中沼清藏 拇印

新潟縣士族

三十六年十一ヶ月

一自今儀明治七年二月中出京鳥森町一番地寺田正
也方ヘ寄同年十二月中旧主人従五位溝口直正ヲ
州遍経歴ノ節随行イタシ薩児島マデ参リ旧主人
ハ直ニ飯京自分一人跡ニ残リ昨八年七月下旬之
戻リ会八月中旧主人ノ用向ヲ以テ西京ヘ参リ会
九月上旬帰京公縣士族三浦清風方ヘ寄留罷在候
然ルニ先年底兎島縣ニ於テ懇意ニ相成公縣士族
中山中左エ門出京イタシ居リ度々相越シ候内来
テ一面會ノイタシ候愛知縣士族丹羽精五郎ニ再會
追々懇意ニ相成昨年十一月上旬ト覚自宅ニ参リ
差向金二百圓入用ノ趣相談有之ニ付方ハ何等ノ

ノ入用ニ候哉相尋候処今日ノ御政体ニテハ
皇國維持シ難ク就テハ奸曲ノ大臣ヲ暗殺可致旨
全志ノ者ト相謀リ自分ハ周旋擔當罷在候ニ付入
用ノ趣甲聞候ヘドモ其節ハ曖昧ノ答イタシ立別
レ候後再三催促ヲ受候処大金故迚モ不及力殺相
断然ルニ其後参リ金策出来候ニ付不遠手ヲ下ス
ヘキ由相咄シ同志ノ者ハ児玉等外十六七名モ有
之趣其後十一月下旬丹羽精五郎自宅ヘ参リ候ニ
付彼レノ談話ヲ案ルニ左大臣島津久光参議板垣
退助免官相成タルニ付必ス其党類起ルヘク方鎮
壓ノタメ英國ノ兵隊ヲ借受ケヘキ旨大臣方近頃
横濱ニテ外國公使ヘ談判相整十二月二十日マテ
ニ其兵隊着艦スヘキ趣ニ付方者艦前ニ太戸大久

国立公文書館
National Archives of Japan

保ノ両参議ヲ教害スヘシト申開候ニ付自分ニモ
尤ノ儀ト存候其後ハ絶テ面會モ不致如何相成候
哉ト存居候処本年一月七日久々ニテ丹羽精五郎
相越シ右事件彼是同旋イタシ候ヘトモ好機會無
之未タ遺延罷在候付テハ明八日陸軍卿ニ付大臣
参議ノ恭集ヲ探索イタシ呉候様依頼ニ付自分ニ
ハ難及且明ヒトテハ尚更ノ儀ト相断候処山本文
之助ハ自分兼テ知ル人ニ付方探索ノ儀ヲ依頼イ
タシ呉候様申聞候故其後山本文之助宅ニ相越シ
自分ノ考ニテ右大久保本戸ノ両参議他行先等探
索イタシ候ハヽ相分ルヘキヤ窃ニ相尋候処其儀
ハ随分相分リ可申ト山本文之助申候ニ付然ラハ
探索ノ上相分リ候ハヽ他行一日前報知イタシ呉
候様依頼イタシ置候処本年二月七日御拘引相成
其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月二日
柿本勤拇印
熊本縣士族
志垣周策
二十年十一ヶ月
一自分儀昨明治八年二月中学問修行トシテ出京濱
町二丁目細川邸内住居伯父大森正義方ヘ着仝年
五月中ト覚小石川大塚久保町吉野立蔵方ヘ入塾
移行罷在候処仝九月中芝増上寺地中弘度院内塙

學校ヘ轉塾イタシ其後右學校愛宕下町三番地片
桐邸中長屋ヘ移リ校中ニテ仝志ノモノト屢議論
ニ及ヒ候際仝十二月中旬頃底兒島縣士族兒玉孝
青森縣士族七戸不二郎旧白川縣士族清島竜太郎
自分トモ芝金杉屋号不知旅店ヘ相越シ對酌中ノ
談ニ此ノ如ク朝鮮ヨリ侮慢ヲ受ケ未タ憤発スル
モノ之ナク歎息ノ次第ニ付各身命ヲ抛チ天子ニ
報ユヘシト論シ候処兒玉孝申スニ先ツ民怨ヲ皆
シタル在朝ノ大奸ヲ斃サヽレハ皇國振ハサルニ
付其罪ヲ可糺ト申候ニ付右ハ在朝ノ大臣ニモ其
罪免ルヘカラズ候ヘトモ下人民ニ至テモ亦其罪
ナキニ非ス兎角人民ノ元気ヲ張リ然ル後罪ヲル
者ハ可糺旨申述候ヘトモ議論急激ニ出テ自論不

相立故諸君速ニスル次第ナレハ其説ニ從フヘシ
ト申候其夜ハ兒玉孝七戸不二郎自分トモ品川宿
松田屋ヘ相越シ遊興イタシ翌朝一仝右酒食ノ入
費共ニ其前金於旅店ノ雜費孝ニテ都テ兒玉孝相
拂ヒ立歸リ尚兒玉孝下宿神田御町尼屋方ヘ清島
竜太郎七戸不二郎自分共三人ニテ罷越シ一酌雜
談ノ末自分ハ用向有之濱町ノ方ヘ相廻リ申候其
前日ハ失念七戸不二郎兒玉孝自分トモ三人ニテ
櫻田島津邸内中山中左衛門方仝居濱島正誠方ヘ
咄ニ可參旨ニテ相越シ取路右邸中ニテ兒玉孝刀
ヲ所持シ自分ニ貸遣スヘキ旨申スニ付一應ハ辞
退イタシ候ヘトモ強テ申スニ付不得止受取腰ニ
差シ愛宕下學校ヘ帰ル途中ニテ衆疑ヲ解ク為メ

国立公文書館
National Archives of Japan

児玉ニ渡シ仝人所持シテ学校内七戸不二郎ノ席ニ入レ置キ候処本年一月二十二日御拘引相成其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十六日

志垣周策 印

一明治八年十二月中旬頃児玉等七戸不二郎清島竜太郎ト金杉旅店ニ相越シ對酌中ノ談ハ目今朝鮮ヨリ侮慢ヲ受候ヘトモ未タ奮発スルモノ無之ニ付万民ニ於テ元気ヲ張リ身命ヲ抛チ皇國ニ報ユヘク若シ之レヲ拒ハノ大臣アレハ兼テ御誓文ノ万機公論ニ決スヘシトノ御旨意ニ因リ万民ヨリ言路ヲ以テ其大臣ヲ拂退ケ恥辱ヲ雪クヘキ旨談論及ヒ彼処児玉等至極結構ナルヿト申聞大ニ酒ヲ勧メラレ候節児玉等ヨリ當時在朝ノ大奸ヲ覺スヘキ等ノ癸論ハ自分ニ於テハ更ニ義知イタサス仝ク警視廳ニテハ糾問ノ厳酷ニ耐サルヨリ不得止児玉等大奸ヲ覺スノ議論ニ從フト申立候ヘトモ其儀ハ決テ覺無之候事

一清島竜太郎七戸不二郎自分共三人ヒテ児玉等下宿ヘ相越候節朝鮮征討抔ノ談ハ一切無之候事

一丹羽精太郎ノ刀ヲ借受候儀ハ元来謂ハレ無之濱島正誠方ヘ児玉等七戸不二郎自分話ニ参リ候節児玉等持参スヘキ旨申聞候ニ付自分ハ入用無之候ヘトモ途中帯刀イタシ搞学校門前ニテ直ニ児

玉峯ヘ相渡候ヿニテ其後ノ事ハ一切覚無之候ヘ
トモ学校内七戸不二郎ノ席ニ有之候ヲ見受候事
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十六日

志垣周策 拇印

青森縣士族

七ノ戸不二郎

二十四年四ヶ月

一自分儀明治七年五月中台灣事件ニテ支那ト葛藤
ヲ生シ候ニ付縣地出立仝月中着京本所緑町三丁
目三番地十一屋ニ止宿仝八月中鹿島縣ヘ相越シ
諸有志ニ面會前件ノ儀ニ付種々議論及ヒ候ヘト

モ自論貫キ難ク依テ仝十月中仝縣出立九州中國
四國ヲ經歴イタシ候末東京ニ立戻リ一時前書十
一屋ヘ着間モナク芝山内弘度院内塙義塾ヘ入学
イタシ罷在リ當今ノ時態ヲ見ルニ琉球ニ於テハ
其内心全ク支那ヲ仰キ近頃日本支那両屬ノ儀ヲ
我朝廷ヘ願出候然シハ琉球人保護ノ為メ前年ノ
台灣征討ニ妄リニ巨財ヲ費シ到底無用ノ擧ニ屬
シ且又樺太千島交換ヲ名トシ實ハ我版圖ノ地ヲ
暴西亞ニ分與シ候事ノ處置當路ノ大臣ニ於テ其
罪免シヘカラサル儀ト慷慨イタシ候折柄仝十一
月中旬仝縣士族吉村常五郎宇佐美桂作両人ノ内
ヨリ鹿児島縣士族玉峯通新石町旅店青太屋ニ
止宿イタシ居候由承リ尤児玉峯儀ハ兼テ聞及候

人ニテ幸面會イタシ度ト存シ相越シ候処神田柳
町尼屋方ヘ轉病ノ赴ニ付早速会所ヘ相尋ルニ折
悪シク不在再度相尋ネ初テ面會種々談話ノ末内田
政風建言ノ談ニ渉リ互ニ其當否ヲ討論候マテニ
テ立別レ其後追々往来シ公十二月十三日頃ト覚
右見玉等方ヘ罷越候節田白川縣士族夫野照政田
島取縣士族秋田登恭ト居深更ニイタリ右両名立
帰ル跡ニテ廟堂上ノ事ヲ議シ實ニ目今ノ形勢ニ
依レハ到底國家振起スヘキ目途無之付テハ折ヲ
除キ政体一変セサル可カラサルノ論ニ渉リ見玉
等申スニ木戸大久保ノ両参議ノ如キハ尤奸臣ニ
シテ一ツトシテ両人ノ私情ニ出ラサルナク漸然
此両奸臣ヲ殺害不致候ヲハ往々政体難相立仍テ

其儀ハ已ニ決死シテ全志ト約ス然レトモ今一人全
意ノモノ有之候ハヽ必此事相果スヘシト申故自
分ニ於テモ一昨明治七年大久保利通湯治ヲ名ト
シ大阪ニ於テ會議ヲ開キ候專斷ノ処置天皇陛下
ニ對シ不敬ノイタリト存候且木戸孝允ハ右大阪
會議ノ節板垣退助ト参議諸省卿分権ノ義ヲ為シ
置キ候ニ其約ヲ蹈マス因循ニ渉リ右ハ委細板垣
建白書中ニ相見ヘ候並ニ今般左大臣島津久光参
議板垣退助ヲ貶斥セシハ右大久保木戸両人ノ吉意
ニ出テ候儀ト存シ居候ニ付素ヨリ全意ノ趣相咎
候ヘハ則書面一冊取出スニヨリ披見スルニ木戸
大久保ノ両参議ニ殺害スヘキ旨記載有之其夜ハ
兒玉等方ヘ一泊尚全十六日頃ト覚ヘ全志兒玉等

清島龍太郎志垣周作自分トモ芝金杉屋号覺ヘズ
酒店ニ集會シ互ニ憂國ノ情ヲ述ヘ両参議ヲ近日
途中ニ於テ殺害可致旨相謀リ已ニ大久保参議他
行先キハ明日相分ルヘキニ付兒玉等方ヘ明日會
合可致旨仝人ヨリ承リ異論之レナク尤森川筆ハ
當日會同不致議事一定セス翌十七日前日ノ人數
ニテ兒玉等方ヘ集會大久保利通殺害ノ手筈ヲ議
シ其日ハ空シク立別レ尚追々會合スルニ途中ニ
於テ事ヲ謀ルモ安藤對馬ノ例モ有之ヲ以テ疎漏
ニ出テサル様仝志ト相議シ已ニ事ヲ遂ケ候ハヽ
直ニ正院ヘ自首可致兼テノ約定其折可差出書面
ヘ姓名未タ記載不致何レ事相果スノ機ニイタツ
テハ必連名記載スヘキ段申合セ置候処仝志ノ内

清島龍太郎儀無拠事情有之トテ仝二十七日頃当
地出立帰縣イタシ候故仝志相減シ外同志モ因循
ノ模様ニ有之且自分見込ニハ同志十人モ之レナ
クテハ事ヲ成スト存シ遅々打過罷在候処仝三十
日自分一人兒玉等方ヘ相尋ルニ不在ニ付本所緑
町十一屋ヘ参リ止宿其後本年一月三日兒玉等月
分旅宿ヘ尋参リ本日ハ濱離宮ニ於テ大臣参議方
ヘ酒餞賜候趣承リ候間仝道大久保ノ退可見居
旨申聞則仝道新橋迄遣ニテ延査ニ承ルニ本日濱
離宮ニ大臣参議参殿無之由ニ付空シク立分レ尤
自分ハ當日短刀ヲ帯シ居候其後仍ホ機會ヲ待居
候内一月十四日御拘引相成其後大審院ニ於テ御
吟味ヲ受候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月四日

七ノ戸不二郎 拇印

熊本縣士族

森川喜三郎二男

森川 篁

二十七年十一ヶ月

一自分儀去ル明治六年六月中漢學修行トシテ出京
所々止宿ノ末愛宕下町二丁目三番地塙學校ヘ入
塾罷在仝縣中邵雜善旅宿ヘ折々相越シ候処庶見
島縣士族兒玉誉儀古雜善ト仝宿罷在リ時々面會
ノ末懇意ニ相成其後兒玉誉儀神田柳町旅人宿尼
屋其方ニ止宿ノ赴承リ互ニ往来イタシ昨八年十
一月上旬日不覚会人方ヘ相尋候処種々相談モ有
之趣ニテ酒店ヘ可相越旨申ニ付仝道イタシ仝所
料理店新井屋其方ヘ相越シ酒宴罷在候内旧白川
縣士族清島竜太郎尋参リ候々歌酒当今御政体ノ
可否等談論ノ末仝所立出三人一仝芝愛宕山ヘ相
越シ茶店ニ休息尚歌洲川料屋ヘ相越シ酒宴相催
シ迫々國政ノ可否等議論ノ上太戸大久保ハ両参
議ハ當時廟堂ニ在テ私意ノ怒ニシ百事両氏ハ胸
中ニ出ヲ以テ内外ノ大患ヲ生シ 皇國已ニ衰
頽ノ甚シキニイタル曰テ両氏ヲ斃ノ外シ 皇
國終ニ不測ノ災ニ陥ル分テハ密ニ事ヲ謀リ
両氏ヲ暗殺可致旨兒玉誉清島竜太郎両人ノ発論

ニ出テ自分見込ニ於テハ全意ノ人数ト多分ノ金
圖ト無之ヲハ差支モ可有之旨両人ヘ申聞候処児
玉等ニ於テ金策ノ見込ハ有之趣ニ付余ハ追々相
談可致旨相約シ会所立去リ阪路品川宿貸坐敷松
岡ヘ登楼入費等ハ児玉等ヨリ相拂翌朝ニイタリ
三人一同児玉等下宿ヘイタリ尚佐久間町ヨリ乗
船両國川筋ニテ船儀イタシ日暮船宿ニテ児玉等
ヨリ右拂ヲナシ立阪ヘ遠中田白川縣士族池松豐
記ヘモ右事情相咄シ会志ニ可引入申合セ阪路清
島竜太郎ハ池松方ヘ相越シ途中ヨリ児玉等ニモ
立別シ帰塾ノ上清島竜太郎ニ面會池松豐記ノ儀
子承リ候処会人方ニ来客有之空シク立戻リ候趣
其後自分一人児玉等方ヘ相越シ面會ノ砌会人ヨ

リ兼テ相談イタシ置候暗殺ノ儀ニ付大臣ノ奸曲
ヲ記載候趣ニテ書面指出候ニ付一見ノ処誇律律
等ヲ設ケ言路ヲ壅蔽スルヲ以テ暗殺云々ト認有
之尤見終リ候際来客ニ付書面児玉ヘ相渡シ余ハ
雑話ニ押移リ阪塾イタシ会月中日失念尚児玉等
自分方ヘ参リ候節児玉等ヨリ兼テ相談ノ儀ヲ断
然次々ヘキ旨申勧ノ候ニ付自分ニ於テハ未タ会
志ノ人少ナク何分見込不相立趣相答立別シ候後
十一月初旬児玉等方ヘ相尋候処外ニ来客モ有之
酒差出候ニ付一酔ノ後児玉等両人ニテ恵津ニ登
楼ノ折児玉等ヨリ自分ヲ不審ニモ存シ候ヤ盃部
ニテハ無之ヤト相尋候ニ付左様ニテハ之レナク
ト相答タル儀モ有之候其後月日不覚児玉等清島

竜太郎七戸不二郎志垣周作自分トモ五人ニテ愛宕山茶店ヘ立寄リ候処大久保参議両三日中重野其方ヘ相越候風聞ニ付其節事ヲ果スヘシト児玉等申聞仍ホ委細ハ金杉料理店ニテ相談スヘキ旨ニテ一同々所ヘ立越候途中自分ハ兼テ知ル人ニ出逢ヒ候ニ付相分レ候後外四名ハ金杉ヨリ品川ヘ相越シ登楼イタシ候趣尤児玉等下宿ヘ再會ノ上決議可致約束ニ有之旨ニ付右會議ヘ可相越ト存シ翌朝立出候際用向有之他所ヘ相廻リ午後四時頃見参方ヘ相越シ候処議論區々ニテ一会退散相成候趣全人ヨリ承リ候自分ニハ兼テ遅疑イタシ居候ヘトモ一旦大事ヲ相謀ラレ候上ハ容易ニ其同志ヲ脱シ難キ義理モ之レアリ彼是思案中ニ付翌日ノ集會ニモ遅刻イタシ候処自分一人會席ニ渡レ候トテ当日決議不相成旨来リ児玉ヘ立分レ候後本年一月十二月御相引其後大審院ニ於テ御吟味ヲ受候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十日　森川望　拇印

一兒玉等清島龍太郎ト有之候ヘトモ右ハ児玉等一人ノ発論ニ有之候事

一金策ノ見込ト有之候ハ二十金位ハ忽チ便スヘキト児玉等申聞候事ニ有之候

一池相豐記ヲ引入候儀ハ自分申合セハ不変児玉等清島龍太郎両人相談イタシ續テ自分ヘモ相談相

国立公文書館 National Archives of Japan

請願事

一立別レ候翌日児玉等下宿ヘ會議ノ儀ハ清岳龍太郎ヨリ承リ候事

一木戸大久保両参議暗殺ノ儀ハ人少且金力無之候間迚モ見込不相立候ニ付児玉等ト立別レ候除此儀ハ再ヒ共議セサル旨相断候処等儀サウカト相答候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月十日

森川篁 栩印

鹿児島縣士族

土持十之助

一自今儀昨明治八年十月九日縣地出立商法ノ見込ニテ出京ヲ致シ候処其後右見込ノ儀相違致シ思敷相運ヒ兼候ニ付京来櫻田ニ有之高津久光邸内ニ全縣士族中山中左衛門外濱島正誠仝居寄留罷在候ニ付仝所ヘ止宿イタシ候然ル処十二月二十日比ニモ候哉濱島正誠自分ヘ申聞候ニハ方今ノ形勢實ニ奸臣庸堂ニ充満シ殊ニ木戸孝允大久保利通両参議ノ如キハ真ニ奸臣ニシテ到底御國体ノ立行ヘカラサルヲ憂ヘ同縣士族児玉等ハ已ニ死ヲ決シ右両参議ヲ可暗殺云々兼リ自分ニ於テモ仝意ノ趣相答候ヘトモ自分ハ外ニ見込有之候ニ付余リ談判モイタサス其見込ト申スハ畢ニ従

三十六年七月

二位島津久光十四ヶ條ノ建言ヲ至當ト存シ傍ラ
方今ノ形狀ヲ目擊スルニ久光任官前後建言モ御
採用無之下人民ハ日々塗炭ニ苦シ賢ニ坐ナガラ
ニシテ亡國ヲ待ノ景狀ヲ如何ンモ必竟太戸大久保兩
奸臣廟堂ニ立テ忠言ヲ容レス内政令ヲ私ニス
ルヨリ一ニテ臣子ノ分難忍殊ニ大久保利通ニ
於テハ深ク久光ノ恩義モ有之候処唯陽ニハ久光
ノタメヲ尽ス姿ニテ陰ニハ之レヲ拒ムノ勢ニ有
之尤右久光ノ建言朝廷ニテイテ御採用無之ハ素
ヨリ不得止次第ニ候ヘトモ抑其可否モ無之免職
相成候ハ畢竟奸臣ノ所為ニ出テ候儀ニ有之候間
大久保利通ハ公縣ノ儀ニ付是非面會議論ノ末到
底事難成節ハ即坐ニ彼レヲ刺シ進退可決志ニ有

之候ヘトモ今日ニイタリ其事ヲ果サス遺憾ニ存
シ罷在候尤前申上候通児玉参議暗殺云々ハ濱
崎正誠氏ニ丹羽精五郎中山中左衛門ヘ
然レ氏児玉参暗殺ノ儀余リ遷延イタシ候ニ付自
分一人ニテ大久保利通ヲ直ニ可刺決心アルヲ以
テ一應中山中左衛門ヘ右ノ情狀語合候処大久保
利通出先参判然不致内怒卒ニイタス間敷ト被指
留候其後九年一月上旬ト覚新潟縣士族三浦清見
ノ周旋ニテ山本文之助ト申モノヘ大久保利通ノ
出先参探索為致申スヘキ為ノ三浦清風宅ニテ右
山本文之助ヘ出會文之助公道当時中山中左衛門
儀ハ芝新銭坐ヘ下宿罷在候ニ付全所ヘ案内イタ
シ候末大久保利通出先参探索云々ハ中山中左衛

門ヨリ申聞候儀ニ有之然ル処九年一月中山中左
衛門始濱島正誠等御引揚相成御調ヲ受候趣承居
候処九年四月廿日御拘引相成御調ヲ受其後大審
院ニ於テ御吟味ヲ受候事
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月七日

土持十之助 拇印

一濱島正誠ヨリ承リ候ハ奸臣廟堂ニ充満スニトノ
ヿヽテニテ木戸孝允大久保利通ノ両人ヲ指シ候
テノヿニ之シナシ
右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月七日

土持十之助 拇印

一山本克ハ一時七年ヿ鹿児島縣ヘ来リ自分方ヘ尋
参リ度々面會イタシ候且昨年出京以来モ尚又度
々相越シ面會イタシ候ヘトモ國事ノ儀ハ別段駁
ト相談シ候儀無之朝鮮ニ於テ前ニ不敬ヲナシ
又今般彼ヨリ発砲スルハ國辱ヲ受ル儀ニ付是
非征討セネハ相成ラサル旨ノ話シイタシ候儀モ
有之候ヘトモ昨年十一月頃ヨリハ疎遠ニ相成申
候ニ付勿論朝鮮征討ノ策等ハ尚更相談イタシ候
儀無之候

一島邸安度ハ昨八年自分出京以来度々面會懇意ニ
相成候朝鮮事件ノ起リ候トキ島村宅ヘモ相越シ

土持十之助 拇印

今般ハ是非御征計相成度旨話シイタシ候ヘドモ
其策ニ至テハ脆ト相談イタシ候儀無之候尤支那
葛藤ノ節公様諸縣有志ノ者出軍ヲ渇望可致ナレ
トモ無名ニテハ不相成候ニ付必是ハ海軍省ヘ願
出仝所ノ許可ヲ受不申ハ不相成事ト相話候候ニ
テ別段安度ト他ニ申談候儀無之候事

一中沼精蔵ハ昨八年目分出京以来ノ鬱意ニ有之候
朝鮮事件ノ起リ候節トモニ話合ハイタシ候ヘド
モ到底当邦安度ト相話候通リノ儀ニ有之候事

一志法要一郎ハ前年ヨリ鬱意ニテ度々往来イタシ
候ヘトモ別段國事ヲ議シ候ヲハ無之候朝鮮ノ事
件モ共ニ話合ハイタシ候ヘトモ要一郎ハ田主人
ニ於テ尽力有之候ニ付他縣ノ人ト同意シテ上書

建白等ハ一切不致心得ノ旨申居候其他相交リ候
人物ハ無之候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月二十九日　中山中左衛門　拇印

一木戸大久保ノ両参議アリテハ御政体相立ス候ニ
付剣殺スヘシ就テハ右両参議出入ノ探索ヲ山本
文之助ヘ依頼イタス積リナレ共文之助来ル十廷
引ニ付仝人参リ候ハヽ右ノ趣自分ヨリ文之助ヘ
申聞候様中左エ門申置候ヲ引取候ニ付其内文之
助参リ候間其旨相話候処仝人暫無言ニテ相考居
候上何分容易ナラサル事ニ付篤ト勘考ノ上返答
イタスヘキ旨申聞候事

一八年十二月日不記中山中左衛門ヨリ山本文之助ヘ
相類候探索ノ了ハ先見合候様申遣シ呉ヘキ旨手
紙ニテ申越候ニ付其趣手紙ニテ文之助ヘ申遣其
後本年一月中日不記尚又中左エ門ヨリ文之助ヲ
新戎坐寄留地マテ参リ呉候様申遣ヘキ旨申越候
ニ付其趣文之助ヘ手紙ニテ申遣候事
但自分口供中ニ本年一月中丹ヒ探索ノ了ヲ相
頼度旨中左衛門ヨリ申越候ト有之候者全ク自
分ノ想像ニ有之候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月二十九日　三浦清風　㊞

一自分口供中ニ丹羽精五郎ニ面會ノ節大臣参議横

濱ニテ英國公使ヘ談判有之其仔細ハ國内不穩リ
ル形勢ニ付其節ハ英國ノ兵隊ヲ借受ケ度旨御評
議有之十一月中旬ニハ着艦可相成ニ付其以前ニ
必ズ木戸大久保ノ両参議ヲ殺害スヘシト丹羽精五
郎ヨリ承リ候趣ハ山本文之助ヘモ相話仝人モ承
知イタシ居リ候義ニ有之候事
右ノ通相違不申上候以上
明治九年十一月廿九日　柳本動　㊞

一本年一月七日丹羽精五郎参リ為テ心掛居リ候大
臣参議暗殺ノ一條大ニ延引シタリ就テハ明八日
陸軍省ニ付大臣参議ノ参集可有之付テハ其内何
其カ出頭ニ十九ヤ慥カナルヿヲ探索シ呉候様申

又ニ付自分ニ於テハ中々分ラサル旨相答候処山
本文之助自分知己ノ趣聞及ヒ候ニ付文之助ヘ依
頼イタシ呉候ヘハ相分ルヘキニ付依頼シ呉候様
精之郎申聞候ニ付明日ニテハ迚モ分ル間敷直チ
ニ丹羽ニ於テ文之助方ヘ参候方可然旨申聞相分
シ申候其後自分儀浅草近傍ヘ用向有之候ニ付文
之助方ヘ立寄リ先日丹羽精五郎参リ大臣参議暗
殺ノ儀ニ付探索ノ儀自分ヘ依頼有之候ヘトモ其
節ハ陸軍始一日前ノ事ニ付迚モ自分ニハ及サル
旨相考候処文之助ハ手廣ノ人ニ付自分ヨリ依頼
シ呉ヘキ旨申聞ニ付直チニ丹羽ニ於テ文之助方
ヘ参ルヘキ旨断候ヘトモ異シテ其後丹羽参リタ
ルヤト相尋候処参ラサル旨文之助申聞候ニ付自
分心得ニテ若シ本戸大久保ノ他庁先相分ルヘキ
ヤト相尋候處心掛候ヘハ隨分相分ルヘキ旨申聞
候事

但文之助方ヘ立寄候節大臣参議暗殺ノ儀口上
ニテハ不申聞候ヘトモ右事件ハ兼テ文之助モ
承知イタシ居候上ノ儀ニ付彼方ニテハ心得居候
事ニ有之候事

右ノ通相違不申上候以上

明治九年十一月二十九日

柳本勤印

書記官 議按

別紙司法省上申鹿児島縣士族中山中左衛門以下十

五名ノ犯罪擬律左ノ通御指令可相成哉奉伺候也

司法省上申

鹿兒島縣士族中山中左衛門外十五名處分方ノ儀先般伺ノ末去九十二日處斷濟別紙ノ通大審院ヨリ屆出候間此段及上申置候也 五月十七日 司法

大審院伺代理二等判事玉乃世履 司法省宛

鹿兒島縣士族中山中左衛門外十五名本日別紙ノ通及處斷候條此段上申候也 五月十二日

追テ右十五名ノ内山本文之助儀ハ兼テ病氣ノ處當今大患ニテ本日難罷出旨保証人鈴木太郎左衛門ヨリ医業ヲ以テ届出候條其旨承屆追テ快氣次第可及處分候條此段添テ上申候也

裁判申渡書

鹿兒島縣士族

中山中左衛門

其方儀兒玉誉ナル者同志ヲ募リ當路ノ大臣ヲ刺殺セントスル企ルノ論ニ與ルモ之レヲ差止タル旨申立ルト雖モ兒玉誉ノ口供ニ於テハ其刺殺ノ儀ヲ相謀タル處申左衛門快然ト協議スト之レアリ丹羽精五郎ノ口供ニ於テモ尓後其方ヨリ精五郎ヲシテ兒玉誉ノ中間ニ在テ計策ヲ通シ同盟ヲカシメタル旨申立加之山本文之助ヲシテ大臣ヲ刺殺スル為ニ大臣ノ擧動ヲ探察セシメタル事ハ三浦清風ノ口供ニ於テモ証跡明瞭ナレハ其實兒玉誉ト協議スルノミナラス其方ハ於テモ當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ画策ヲナスモノナリ且朝鮮江華灣砲擊事件ニ付先鋒ヲ出願シ大擧シテ朝廷ニ迫リ政体改革ヲランヿヲ山本克島卿安度等ト協議セシハ山本克島卿安度ノ口供ニモ判然タルモノニシテ朝憲ヲ紊乱セントスル者ニ依ヲ除族ノ上懲役十年可申付ノ處明治九年十一月十三日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十日ヲ過ルヲ以テ懲役九年二百十五日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

鹿兒島縣士族
兒玉軍司節

兒玉等

其方儀當路ノ大臣ヲ刺殺セントス企意シ中山中左衛門ニ協議ヲ遂ケ尓後丹羽精五郎以下仝志ヲ募リ其畫策ヲナス段朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族

国立公文書館
National Archives of Japan

ノ上懲役十年可申付ノ処明治九年十一月八日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十日ヲ過ルヲ以テ懲役九年二百十日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

愛知縣士族　丹羽精五郎

其方儀兇玉等ナル者仝志ヲ募リ當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ発論ヲ中山中左衛門ヨリ承知シ尓後中山中左衛門ト兇玉等トノ中間ニ在テ計策ノ周旋ヲ為スノミナラス仍ホ兇玉等ノ意ヲ受ケ刺殺ノ旨意書ヲ起稿スル等朝憲ノ紊乱セント企ル者ニ依リ除族ノ上懲役七年可申付ノ処明治九年十一月一日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十二日ヲ過ルヲ以テ懲役六年二百三日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

京都府山城國愛宕郡第一區盧谷村農　山本克

其方儀朝鮮江華湾砲擊事件ニ付先鋒ヲ出願シ大等レテ朝廷ニ迫リ當路ノ大臣ヲ誅戮シ政体改革ヲ謀ルヘクト島崎安度中山中左衛門中沼清蔵ト協議シタル筋朝憲ヲ紊乱セント企ル者ニ依リ懲役七年可申付ノ処明治九年十一月六日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十七日ヲ過ルヲ以テ懲役六年二百八日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

高知縣士族

国立公文書館
National Archives of Japan

島邨安度

其方儀朝鮮江華灣砲擊事件ニ付先鋒ヲ出願シ人衆ニテ朝廷ニ迫訴シ政体改革ヲ申出ヘクト山本克中沼清蔵中小中左衛門ト協議シ仍ホ中山中左衛門ニ於テ當路ノ大臣ヲ刺殺スヘキ旨見玉峯ト謀議決スルヲ中山中左衛門ヨリ承知シ傍觀シテ機會ヲ待ツ教朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役三年可申付ノ処明治九年十一月六日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十七日ヲ過ルヲ以テ懲役二年二百八日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

高知縣士族　小笠原和平

其方儀朝鮮江華灣砲擊事件ニ付企志ト共ニ建言スヘキ旨七河原塚茂太郎ノ発議ニ合意シタル迄ニテ大擧シテ朝廷ニ迫ル考ノ儀ハ素ヨリ覺之ナキ旨申立ルト雖モ既ニ島村安度口供ニ於テハ其方共ニ中沼清蔵ト議シ朝鮮征討ノ有無判然セサルニ付人衆ヲ募リ迫訴シテ當路ノ大臣ヲ黙ヶ度旨申立ヽクトアレハ朝憲ヲ紊乱セントス企ルノ黨與ナル者ニ付除族ノ上懲役二年可申付ノ処明治九年十一月六日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十七日ヲ過ルヲ以テ懲役一年二百八日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

新潟縣士族　三浦清風

国立公文書館
National Archives of Japan

其方儀朝鮮江華灣砲擊事件ニ付先鋒ヲ出願シ衆力ヲ以テ政府ニ迫リ政体改革ヲ申出ヘキ旨中山中左衛門ノ申聞ニ公意シ仍ホ中山中左衛門ニ於テ當路ノ大臣ニ刺殺セントスル企アルヲ系知シ尓後其大臣ノ動静ヲ探索スルノ儀ヲ託サレタルニ付山本文之助ヘ通知シタル我朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役三年可申付ノ処明治九年十一月二日口供審詰ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十一日ヲ過ルヲ以テ懲役二年二百四日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

長崎縣士族　志佐要一郎

其方儀朝鮮江華灣砲擊事件ニ付先鋒ヲ出願シ政体改革ヲ以テ政府ニ迫リ政体ヲ申出ヘキ旨中山中左衛門ノ申聞ニ公意シ仍ホ中山中左衛門ニ於テ當路ノ大臣ニ刺殺セントスル企アルヲ系知シ尓後其大臣ノ動静ヲ探索スルノ儀ヲ託サレタルニ付山本文之助ヘ通知シタル我朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役三年可申付ノ処明治九年十一月二日口供審詰ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十一日ヲ過ルヲ以テ懲役二年二百四日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

東京第五大區八小區淺草北田原町三丁目二番地
平民　山本文之助

改革ヲ朝廷ニ迫ルヘクト島村安度中山中左衛門中沼清蔵山本克ト協議シ其後中山中左衛門ニ於テ當路・大臣ヲ刺殺スヘキ旨児玉寿ト謀議セシヲ中左衛門ヨリ承知シ傍観シテ事変ヲ待テ素志ヲ遂ントス滞京罷在ル我朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役三年可申付ノ處明治九年十一月四日口供審詰ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十九日ヲ過ルヲ以テ懲役二年二百六日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

其方儀中山中左衛門ヨリ當路大臣ノ動静ヲ探索ノ儀三浦清風ヲ以テ依頼ヲ受ケタルニ付疑惑ヲ生シ

国立公文書館
National Archives of Japan

万一過激ノ事ニ係ハラハ之ヲ説得スヘキ底意ナリト甲立ルトモ岳氏已ニ三浦清風口供ニ於テハ右ハ大臣ヲ刺殺スヘキ為メ其方ヘ探索ヲ依頼スト之レアリ又柳本勤口供ニ於テモ丹羽精五郎ヨリ大臣刺殺ノ儀ヲ承知シタルヲ曾テ其方ヘ相話シ其後探索ノ儀モ見込相尋ネタリトアリテ乃チ中山中左衛門ヨリ依頼ヲ受ケタルノ時ハ既ニ其大臣刺殺ノ事ヲ三浦清風ヨリ承知シ居タルニ付刺殺ノ為メ探索ノ依頼ヲ受ケタルハ証跡判然タルモノニシテ朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ懲役三年可申付ノ処明治九年十一月二日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十一日ヲ過ルヲ以テ懲役二年二百四日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

鹿児島縣士族　濱崎正誠

其方儀朝鮮江華湾砲撃事件ニ付先鋒ヲ出願シ人衆ニテ政体改革ヲ朝廷ニ強訴スヘシト中山中左衛門斯邪安度中沼清蔵等ト場議シ仍ホ當路ノ大臣ヲ刺殺スヘキ旨見込等ト謀議シタルニ付正誠ニ於テモ其心得ニテ罷在ルヘキ旨ヲ中山中左衛門ヨリ申聞ケシヲ承諾シ罷在ル段朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役五年可申付ノ処明治九年十一月一日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十二日ヲ過ルヲ以テ懲役四年二百三日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

其方儀朝鮮江華湾砲撃事件ニ付中山中左衛門ニ於テ衆議ヲ以テ政府非常ノ大改革之ヒアリ度旨申立ヘクトノ儀ヲ島邸安度ヨリ申聞ニ付意シ其後本見込絶念シタリト申立ルト雖氏己ニ島村安度口供ニ於テハ小笠原和平并ニ其方ト再議シ人衆ヲ募リ訴迫シテ大臣ヲ黙ケント中山中左衛門ヘモ謀議ストヒシアリ又山本克口供ニ於テハ島邸安度中山中左衛門ニ其方ト朝鮮先鋒ヲ出願シ大臣ヲ誅戮スヘクト謀議シタリトヒアリテ其謀議セシ者共ノ口供ニ於テハ其方ヨリ謀議ヲ取消シタルトノ口供ナキノミナラス絶念セシト申立テシ時ヨリ以後モ其

京都府管下山城國愛宕郡浄土寺村農中沼長蔵長男

中沼清蔵

謀議セシ者ト従前ノ如ク時々往来セシ上ハ絶念ノ証據之ヒナシ朝憲ヲ紊乱セント企ル者ニ依リ懲役二年可申付ノ処明治九年十一月七日口供審結ノ日ヨリ起算シ禍獄三十日以外百五十六日ヲ過ルヲ以テ懲役一年二百九日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

新潟縣士族

柳本勳

其方儀丹羽精五郎ヨリ企志見玉等其他ノ者ト当路ノ大臣ヲ刺殺セントト謀議スルヲ承知シテ之レニ企意シ尓後大臣ノ動静ヲ探索セン為メ山本文之助ニ相尋ヌル等朝憲ヲ紊乱セント企ル者ニ依リ除族ノ上懲役二年可申付ノ処明治九年十一月二日口供審

国立公文書館
National Archives of Japan

結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百六十一日ヲ過ルヲ以テ懲役一年二百四日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

熊本縣士族

志垣周策

其方儀兒玉孝七戸不二郎孝ト集會ノ節朝鮮ヨリ侮慢ヲ受タルニ付身命ヲ抛チ皇國ニ報スヘキ之レヲ拒ムノ奸臣アレハ言路ヲ以テ擯斥スヘシト發論シタル旨申立ルト雖モ兒玉孝口供ニ於テハ森川篁七戸不二郎其方ト政体ノ可否談論ノ末當路大臣ヲ刺殺スヘキ旨發論シタルニ異議ナク公意スト之レアリ又兒玉孝宅ニ於テハ朝鮮征討ノ談ハ之ナク申立ルト雖モ兒玉孝口供ニハ大臣ヲ斃スノ計策七戸不二郎共ニ其方ト議スト之レアリ及ヒ公意事ヲ果シタル上ハ兼テ懷中書ヲ持シ正院ヘ自首スル約ストアリ七戸不二郎口供ニ於テモ兒玉孝共ニ其方ト大臣ヲ刺殺スルヿヲ議スルトアレハ証跡判然タルモノニシテ朝憲ヲ紊乱セントス企ル者ニ依リ除族ノ上懲役二年可申付ノ処明治九年十一月十六日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百四十七日ヲ過ルヲ以テ懲役一年二百十八日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

青森縣士族

七戸不二郎

其方儀兒玉孝當路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ發論ニ公意シ其刺殺ノ旨意書ヲ一見シ尓後屢會合協力

し大臣ノ動静ヲ伺ントスル段朝憲ヲ紊乱セント企ル者ニ依リ除族ノ上懲役七年可申付ノ処明治九年十一月四日ロ供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十九日ヲ過ルヲ以テ懲役六年二百六日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

熊本縣士族
森川喜三郎二男
森川筆

其方儀兒玉誉当路ノ大臣ヲ刺殺セントスルノ奏論ヲ承知シ且其旨意書ヲモ一見シタル上志人少金力モ之レナキニ付要ヲ遂クヘキ見込ナク其後其方兒玉誉宅ヘ罷越シタル節再議セサル旨ヲ兒玉誉ヘ断リタリト申立ルト雖モ兒玉誉ニ於テハ其方罷越シタル節ハ其方ヨリ謀議ヲ早ク決シ呉レヘキニト申シタリト申立ル上ハ其方ニ於テ再議ヲ断リタリト申立ハ無証ノ申立ニシテ朝憲ヲ紊乱セント企ル者ニ依リ除族ノ上懲役二年可申付ノ処明治九年十一月十日ロ供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十三日ヲ過ルヲ以テ懲役一年二百十二日申付ル者也

明治十年五月十二日　大審院

鹿児島縣士族
土持拾之助

其方儀兒玉誉ニ於テ當路ノ大臣ヲ刺殺スヘキ見込ノ旨濱島正誠ヨリ奏知シテ之レニ企意シ仍ホ兒玉誉ニ於テ着手遷延ニ及ヘハ其方一人ニテモ刺殺ス

ヘキト決心ノ旨已ニ中山中左衛門ヘモ相議リ尓後大臣ノ動静ヲ探索ノ為メ山本文之助ヲ中山中左衛門方ヘ会行スル等朝憲ヲ紊乱セントス企ヘ者ニ依リ除族ノ上懲役五年可申付ノ処明治九年十一月七日口供審結ノ日ヨリ起算シ滞獄三十日以外百五十六日ヲ過ルヲ以テ懲役四年二百九日申付ル者也 司法

明治十年五月十二日　大審院

七月十一日 十年

鹿児島縣士族二木仲作犯罪處分

司法省伺

東京裁判所ヨリ鹿児島縣士族二木仲作犯罪處分ノ儀別紙ノ通伺出候処右犯罪ハ大臣参議ヲ斬殺シ島津久光ヲレテ其志ヲ政治上ニ伸ヘシメントス企謀スル者ニ付本年二月處分方相伺候仝縣士族中山中左衛門以下連名中京都府平民山本克ノ罪狀ト類似候ニ付懲役七年ニ擬定可致処山本克ノ罪タル兵ヲ挙ケテ朝廷ニ迫リ大臣参議ヲ殺死シ御政体ヲ変革セントス謀リ党中ノ一人ハ已ニ高知縣ニ赴キ仝志ヲ募ルニ至レリ二木仲作ニ於テハ兵ヲ挙ルノ意ナリ且書面ヲ島津ノ家令ニ発スルニ止リ未タ徒党ヲ結ヒ

国立公文書館
National Archives of Japan